

滋賀県守山市

勝部西浦遺跡発掘調査報告書

財團法人 古代學協會

京 都

平成 14 年

目 次

第1章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
第1節 遺跡の位置と環境	1
第2節 既往の調査	3
第2章 調査の経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の経過	4
第3章 層序と遺構	5
第1節 層序	5
第2節 遺構の概要	6
第3節 7世紀～8世紀の遺構	7
第4節 15世紀末～17世紀前半の遺構	7
第4章 出土遺物	15
第1節 弥生土器	15
第2節 土師器	15
第3節 土師器（中世）	15
第4節 須恵器	16
第5節 黒色土器・瓦質土器	16
第6節 陶器	17
第7節 磁器	17
第8節 石器・石製品	18
第9節 鉄器・鉄製品	18
第5章 考察	19
第1節 勝部西浦遺跡における遺構の変遷と出土遺物	19
第2節 7世紀の方格地割の可能性	21
第3節 16世紀中葉の火災痕跡について	23
第4節 16世紀末における勝部西浦遺跡周辺の土地改変について	24
第6章 まとめ	26

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置1 (1/800000) 1	第13図 土坑 SK02 平面図・ 断面図 (1/30) 12
第2図 遺跡の位置2 (1/25000) 2	第14図 土坑 SK03 平面図・ 断面図 (1/30) 13
第3図 発掘対象地と トレンチの位置 (1/1000) 2	第15図 土坑 SK04 平面図・ 断面図 (1/30) 13
第4図 グリッド割付図 (1/250) 4	第16図 土坑 SK08 平面図・ 断面図 (1/30) 14
第5図 層序 (1/100) 5	第17図 壁据え付け遺構 SX01・SX02 平面図・見透し図 (1/15) 14
第6図 潟 SD02 平面図・断面図 (1/60) 6	第18図 石器・石製品実測図 (1/3) 17
第7図 潟 SA01 平面図・断面図 (1/60) 7	第19図 鉄器・鉄製品実測図 (1/3) 18
第8図 潟 SA02 平面図・断面図 (1/60) 8	第20図 勝部西浦遺跡およびその周辺に おける遺構の分布 (1/2500) 20
第9図 潟 SD02 平面図・断面図 (1/60) 9	
第10図 井戸 SE01 平面図・ 断面図 (1/30) 9	
第11図 井戸 SE02 平面図・ 断面図 (1/30) 10	
第12図 土坑 SK01 平面図・ 断面図 (1/30) 11	

図 版 目 次

図版 1 調査区全体図 (1/125)	図版 9 上 土坑 SK01 遺物出土状況 (1) (北東より)
図版 2 弱生土器・土節器・須恵器実測図 (1/3)	下 土坑 SK01 遺物出土状況 (2) (北西より)
図版 3 須恵器実測図 (1/3)	図版10 上 土坑 SK01・土坑 SK08 完掘状況 (南東より)
図版 4 黒色土器・瓦質土器・陶器・ 磁器実測図 (1/3)	下 井戸 SE01 断面 (北西より)
図版 5 上 遺跡遠景 (東・コスモ守山五番館屋上より)	図版11 上 壁据え付け遺構 SX01 遺物出土状況 (西より)
下 発掘前光景 (西より)	下 壁据え付け遺構 SX02 遺物出土状況 (西より)
図版 6 上 重機掘削の光景	図版12 上 土坑 SK04 出土土器・須恵器 下 土坑 SK01 出土土器・陶磁器
下 遺構掘り下げの作業光景	図版13 出土陶器
図版 7 上 終了光景 (北東より)	
下 終了光景 (南東より)	
図版 8 上 土坑 SK04 遺物出土状況 (南より) 下 潟 SA01・溝 SD02 完掘状況 (南東より)	

付 表 目 次

第1表 土坑一覧表
第2表 ピット一覧表
第3表 石器・石製品観察表

第4表 鉄器・鉄製品観察表
第5表 土器・陶磁器観察表

例　　言

1. 本書は、平成13年に財團法人古代學協會・古代學研究所が、東洋建設株式会社の委託を受けて行った、滋賀県守山市勝部1丁目17番23号のマンション建設に伴う発掘調査の報告書である。
2. 採図及び図版で使用した方位は磁北である。
3. 第2図には国土交通省国土地理院発行の1/25000 地形図「野洲」・「草津」を、第3図には守山市土木課作成の1/1000 地形図、第20図には同じく守山市作成の1/2500 地形図を使用した。
4. 本書で使用した土色名は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(2000年版)に準じた。
5. 造構・遺物の実測は桐山秀穂が行った。
6. 図版の作成とトレースは桐山が行った。
7. 写真的撮影は江谷 寛が行った。
8. 出土遺物は守山市立埋蔵文化財センターが、調査の記録は財團法人古代學協會がそれぞれ保管する。
9. 本書の執筆は江谷（第6章）と桐山（第1～第5章）が行い、編集は江谷が行った。

第1章 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

第1節 遺跡の位置と環境（第1図～第3図参照）⁽¹⁾

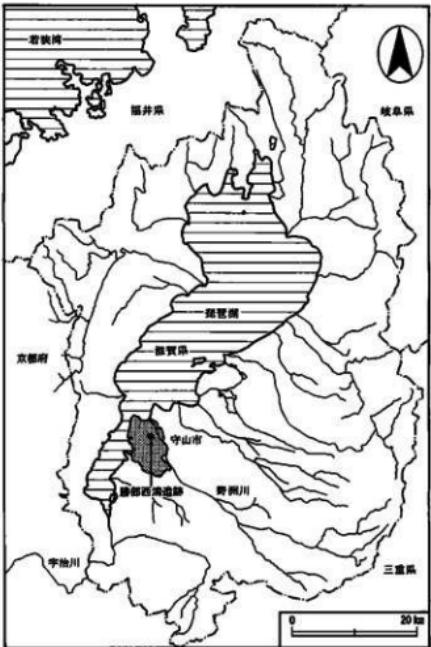
勝部西浦遺跡は滋賀県守山市勝部に所在する。火祭りで有名な勝部神社の道を隔てた北側に広がり、市立守山小学校の南西に位置する。

野洲町から守山市、栗東市、草津市にかけての地域は野洲川による沖積平野が発達している。野洲川は鈴鹿山系を水源として北西方向に流れ下るが、栗東市の伊勢落付近より下流で大きく扇状地を発達させ、その北側に沖積平野が広がる。その平野にはいく筋もの自然堤防がみられ、発掘調査等により旧河道が確認されるなど、野洲川が過去にいく度も流路を変更していることが明らかにされている。

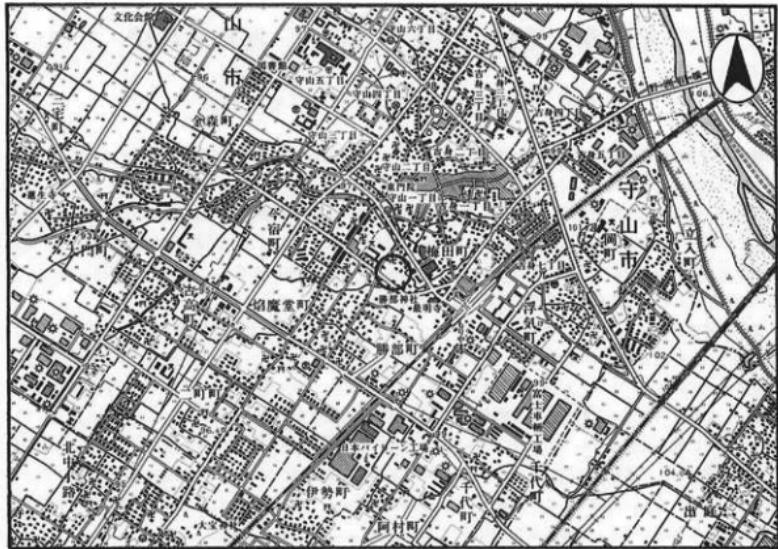
勝部西浦遺跡はこの内往時の野洲川の主流の1つであった旧拂川が形成した自然堤防の1つの上に立地し、標高約 98 m を測る。旧拂川は野洲川の谷口付近より延びると考えられている埋没河川の1つであり、西流し島丸崎で琵琶湖に注ぐとみられる。この両岸に沿って、いくつもの河川堤防が形成され現在の平野の集落はこの上に立地している。当遺跡付近の旧拂川は、現在の守山銀座商店街に沿って流れていると考えられている。この道筋の位置に北西に向かって流れ、旧中山道を越えたあたりから徐々に西に向きを変える。当遺跡が立地する自然堤防はこの遺跡の北西側、今宿町の集落のある側も細長く延びており、北端は西流する旧拂川のところで終わっている。当遺跡はこの自然堤防上の南東端に位置するといえる。また、当遺跡と勝部神社との間に、旧河川の名残とも考えられる小さな川があり、その部分は若干低く湿地状を呈している。したがって当遺跡と現在の勝部の集落とは高地を異にしている。勝部の集落は滋賀県の東は勝部神社付近に始まり、西は県道片岡栗東線まで延びる。ほぼ現在の勝部集落の範囲と重なってくるが東側はJR 琵琶湖線のあたりまで延びてくる。この自然堤防は南北に約 800 m のやや大きいものであり、人間の居住には非常に適した地勢である。

このような自然堤防など沖積平野の高地は、縄文・弥生時代に既に開発され、集落が営まれてきた。勝部西浦遺跡の周辺でいえば、弥生時代の集落には金森遺跡、金森東遺跡、吉身西遺跡、益須寺遺跡などが、古墳時代の集落には古高遺跡、経田遺跡、吉身北遺跡、吉身南遺跡などがあり、こうした歴史を裏付けるものである。また当遺跡の北側守山小学校の地点は女天神遺跡という古墳時代前期の遺跡である。また、この付近には古墳があったという伝承があった⁽²⁾。

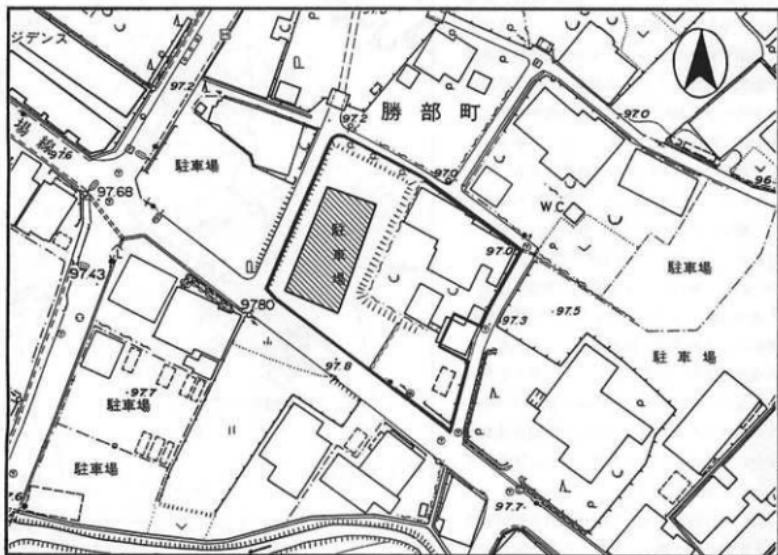
勝部町は昭和30年(1955)の町村合併以前は栗太郡物部村に属していた。この物部という地名は古い。『和名類聚抄』の「物部郷」⁽³⁾



第1図 遺跡の位置1 (1/800000)



第2図 遺跡の位置 2 (1/25000)



第3図 発掘対象地とトレンチの位置 (1/1000)

の遺跡と考えられている。そしてこの「物部郷」は天平12年の『法隆寺伽藍縦起并流記資財帳』⁽⁴⁾にも登場し、遅くとも奈良時代には存在していたことが明らかになっている。また、勝部神社の主神は「物部布津神」であり、石上神宮などと同じく古代氏族の物部氏の氏神であることから、勝部神社や物部郷、物部村は物部氏との関連が指摘されている。

勝部神社について、その由緒ははっきりしない。『延喜式』には登場しないが、『日本文德實錄』の仁寿元年(851)正月条に諸國の神に正六位を授けたとあり、その中に「近江国物部布津神」という名が出てくる。これは勝部神社の祭神と一致する。平安時代前期には神社という形態はとっていないかも知れないが、何らかの形で祭られていたことは確かであろう。

古代条里制において勝部町は栗太郡条里に属す。当遺跡は栗太郡条里二条七里三十二坪付近と考えられる。

また、守山市内では平安時代の仏像がいくつか伝わっている。当遺跡北の安楽寺を始め、東門院、東福寺、蓮生寺、真光寺、福林寺がある。東門院は伝教大師最澄の創建と伝えられるが定かではない。平安時代前期の千手觀音立像、十一面觀音立像、不動明王坐像がある。安楽寺も推古朝開基と伝えられるが、定かではない。ここにも平安時代前期の千手觀音立像が伝えられる。現在の安楽寺は黄葉宗であるが、以前は天台宗で江戸時代に改宗している。天台宗のころの本尊と伝えられ、かつ、勝部神社の祭神の本地仏といわれる。このほか、東福寺には薬師如来像、蓮生寺には薬師如来(仏頭)、真光寺には聖觀音坐像、福林寺には十一面觀音立像が伝えられている。

また、遺跡の北西に接する今宿町は近世中山道の宿場町であり、この付近は交通の要衝でもあったことがうかがわれる。今宿町、守山町は中山道沿いの宿場町であり、一里塚が1基、道標もいくつか残る。また、この街道は近世、朝鮮通信使が利用する街道とされ、東門院はその宿定であった。現在でも旧中山道は朝鮮人街道と通称されている。

この遺跡からはやや離れるが、北東約500mにある金森御堂がある。ここは堅田本福寺とならんで近江の淨土真宗の拠点、湖南地方における中心的存在であった。寛正6年(1465)の比叡山延暦寺衆徒による大谷本願寺破却の際に蓮如もここに一時滞在しており、本願寺との強いつながりを持っていた。そしてここは元亀元年(1570)に近江の浅井長政、越前の朝倉義景に呼応して、織田信長に挙兵した金森一揆の拠点ともなった。また、同じ頃勝部の国人に勝部氏というものがおり、勝部神社付近に勝部城が築いたといわれるが実態はよく分かっていない⁽⁵⁾。

第2節 既往の調査

勝部西浦遺跡はこれまでに昭和55年(1980)に1度発掘調査が行われている⁽⁶⁾。その調査地点は守山市勝部町字西浦174-1番地で、守山小学校のすぐ西側、勝部神社の北約150mの地点である。調査面積は約1200m²で、溝2条、土坑3基、ピットが検出された。この内、遺物が出土し時期が特定できたのは、溝1条(溝-2)のみであった。この溝は北東-南西方向に蛇行しつつ走る溝で幅0.9~1.2m、深さ10~12cm、断面は浅い皿状であった。ここから出土した須恵器・土器は大半が8世紀のものであり、この時期の遺構と考えられている。また、小破片ながら陶邑田辺縄年のTK217段階の杯口身、灰釉陶器柄の底部も出土しており、遺物では7世紀から10世紀と時期的に若干幅がある。しかしこのような遺物は僅少であり、何らかの事情により混入したものとみられている。

註

- (1) 本節では特に断らない限り『守山市史』(守山市史編纂委員会編、守山、昭和49年)を基にしている。
- (2) 山崎秀二『女天神遺跡』(『乙貞』第70号掲載、守山、平成8年)。山崎秀二氏、畠木政美氏ご教示。
- (3) 池邊彌『和名類聚抄考證 増訂版』(東京、昭和45年)。

(4) 『寧樂遺文』中(昭和37年、東京)、344頁~365頁。

(5) 滋賀県教育委員会編『滋賀県中世城郭分布調査』3(大津、昭和63年)。中井均氏ご教示。

(6) 山崎秀二・岩崎陽子『勝部遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第8冊所収、守山、昭和61年)。山崎秀二氏、畠木政美氏ご教示。

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

滋賀県守山市勝部の当該地において平成13年（2001）にマンションが建設されることとなった。それに先立って守山市教育委員会では平成12年11月に試掘調査を行った結果、古墳時代の遺構、遺物が発見されたことから発掘調査が必要であると判断していた。平成13年2月に東洋建設株式会社からの発掘調査の依頼が財團法人古代學協会・古代學研究所にあった。数度の協議を行い検討した結果、これを受託することにし、発掘調査を担当することとした。

発掘の担当は以下の通りである。

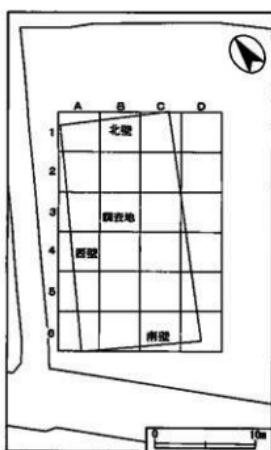
調査主任：江谷 寛（財團法人古代學協会・古代學研究所教授）

調査員：桐山秀穂（財團法人古代學協会・古代學研究所助手）

なお表土の重機掘削および遺構掘削は東洋建設株式会社が担当した。

平成13年3月に契約書締結し、具体的な発掘調査の準備を始めた。調査範囲は守山市教育委員会の指導により、当該地約 700 m² のうち、西半のマンション建設によって掘削される約 300 m² を発掘調査の対象とするとした。そして、現場事務所のプレハブおよび堆土置き場を東側に設けた。3月19日から25日に発掘準備、標高移動、器材準備を行った。

第2節 調査の経過（第4図、図版5～7参照）



第4図 グリッド割付図 (1/250)

発掘調査は平成13年3月26日から開始し、4月11日に終了した。

3月26日から28日に重機により表土掘削、29～30日に遺構検出と調査区の割付けを行った。発掘対象区にはその北端のラインを基準とした 4 m 四方のグリッドを全域に設定することとした。南北にA～D列、東西に1～6列を設定し、各グリッド名は、これらのアルファベットと数字の組み合わせで表すこととした。

4月2日より遺構調査、実測、写真撮影にとりかかり、11日に終了した。

4月11日には調査区全景の写真撮影を行い、守山市教育委員会山崎秀二氏による確認を受けた。同日撤収作業、翌12日に現場引き渡しを行った。

第3章 層序と遺構

第1節 層序 (第5図参照)

基本土層の観察は北壁、南壁、西壁で行った。今回の調査区では現代の削平・擾乱が著しく、調査区の大部分で地山の直上に現代の盛土層が堆積していた。そして部分的に中近世の耕作土が残存している状況であった。

基本層序は大きく3層に分かれる。

I層：調査区の地点には開発原因者である丸尾利一氏の住宅があった。この土層はその住宅建設に伴う盛土である。厚さ0.5~1.0mで、水平に堆積している。

II層：中近世の耕作土層である。調査区6ライン以南の南側では一応しっかりした状態で残存していた。そこでは標高97.1mでほぼ水平に堆積していることが確認できた。このレベルが旧耕作地のレベルであろう。それ以外の区域については小さい範囲でしか残存しておらず、細かな観察はできなかった。以下6層に細分された。

第1層：5Y3/2 オリーブ黒色砂泥（径5mm前後の礫、炭化物を含む）

第2層：5Y4/2 灰オリーブ色砂泥（マンガン粒を含む）

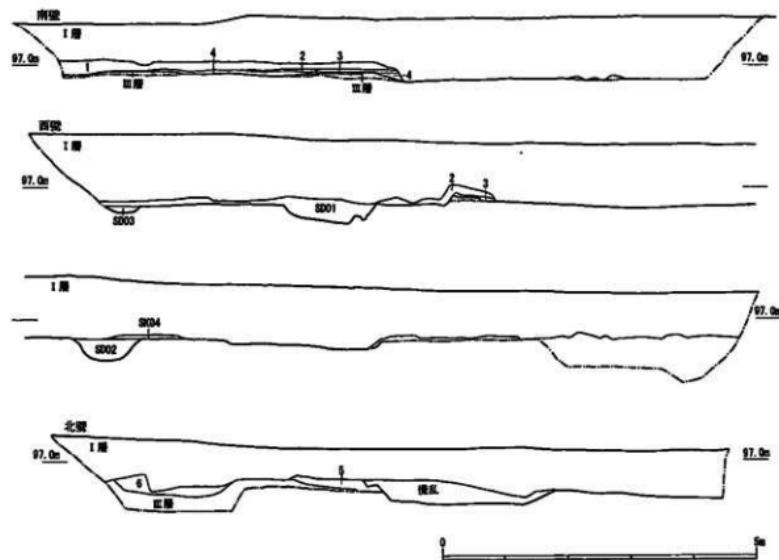
第3層：2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥（マンガン粒を含む）

第4層：2.5Y6/3 にぶい黄色砂泥（マンガン粒を含む）

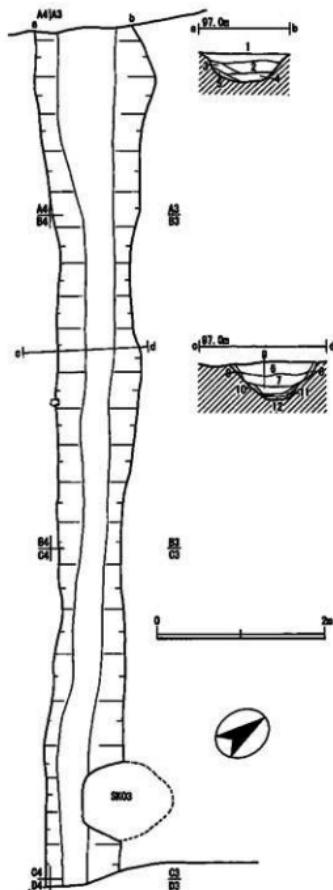
第5層：10YR5/2 灰黄褐色砂泥（マンガン粒、炭化物を含む）

第6層：2.5Y6/2 灰黄色砂泥（マンガン粒、炭化物を含む）

III層：2.5Y6/1 黄灰色砂泥層。地山である。



第5図 層序 (1/100)



第6図 潟 SD02 平面図・断面図 (1/60)

1. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (1~2cmの礫、土器片を含む)
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥
3. 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 (2.5Y6/4に似る、黄色砂泥ブロックを含む)
4. 5Y4/2 黒灰色砂泥
5. 5Y5/2 黒オリーブ色砂泥 (2.5Y3/4 黄褐色砂泥ブロックを含む)
6. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (マンガン粒を含む)
7. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック、マンガン粒を含む)
8. 2.5Y5/6 黄褐色砂泥 (マンガン粒を含む)
9. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (マンガン粒を含む)
10. 10YR5/2 黄褐色砂泥 (2.5Y7/2 黄褐色砂泥ブロックを含む)
11. 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (2.5Y6/2 黄褐色砂泥ブロック、マンガン粒を含む)
12. 5Y5/2 黑オリーブ色泥土

第2節 遺構の概要

(図版1, 第1表・第2表参照)

今回の調査ではⅢ層上面、すなわち地山上面で遺構の検出を行った。発見された遺構は柵列2本、井戸2基、溝3本、土坑8基、ピット73基である。Ⅲ層上面は搅乱や削平のため東から西へかなり低くなってしまっており、したがって検出レベルは96.6mから96.93mまでのばらつきがある。しかし、中近世の遺構の検出レベルは96.7~96.9m付近にまとまる傾向がある。古墳時代の遺構の検出レベルは96.6~96.7m付近である。

遺構・遺物の時期は大きく2時期に分かれる。すなわち、7世紀から8世紀にかけての時期と15世紀末から17世紀前半の時期である。

7世紀から8世紀にかけての主な遺構には溝SD02がある。3ラインにそって北西~南東方向に延びる溝である。条里と方向が一致する溝である。

15世紀末から17世紀前半の時期については主要な遺構として柵列2本、溝2条、井戸1基、土坑2基、堀え付け遺構2基があげられる。柵SA01は3ラインすぐ南に東西にならぶ柵、柵SA02はこれと直行する方向であり、C4区で確認された。溝SD01はB6区に、SD03はA~C4~6区にある。SD03はほぼ正東西方向の溝である。井戸SE01はC2区で確認された。土坑SK01・SK08はともに1辺2mほどの方形の土坑である。位置は6ライン上(B~C)で遺構の向きも条里と一致している。堀え付け遺構SX01、SX02はともにB5区で見つかった。いずれも信楽の甕を据え付けた遺構である。

この時期の遺構からは全体的に焼土、炭化物がよく出土する。この時期の当遺跡の状況を考察するに上で鍵になってこよう。

また、遺構全体として、SD02、SA01が位置する3ライン付近を境として北側は遺構が薄く、南側に遺構が集中していることがわかる。この調査区の南側には勝部神社が鎮座しており、神社との関係に留意すべきであろう。したがって本調査の遺構の変遷のみだけでなく、周辺の土地利用のあり方も含めて検討されなければならない。

第3節 7世紀～8世紀の遺構（第6図、図版8下参照）

1) 棚 SD02

A3, A4, B3, C3区に位置し、3ラインに沿って東西に延びる溝である。幅 75～100 cm, 深さ 30～40 cm で、断面浅いU字状を呈する。方向はこの遺跡付近の条里方位と一致する。埋土は7層に分かれ、最低2回の掘り直しが認められる。いずれも溝の底面に砂や腐植土、鉄分等が堆積しない沈着しておらず、流水や雨水はなかった。また自然に埋没した状況が観察されている。出土遺物には須恵器の杯Hと杯Bが出土している。その所属時期からこの溝の時期は7世紀前半に開削され、8世紀以降埋没したと考えられる。

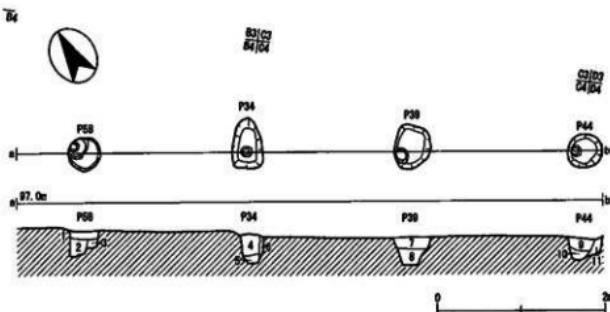
第4節 15世紀末～17世紀前半の遺構（第7図～第17図、図版8～11参照）

1) 棚 SA01

棚 SA01 は B4, C4, D4 区に位置する。条里方位とはほぼ同じ方位を持つ。今回の調査では直径 25～45 cm の円形の柱穴 4 基（西から P58, P34, P39, P44）が約 2 m 間隔で並んでいる。東端の柱穴 P44 は東壁のすぐ近くに位置しており、さらに東に延びる可能性がある。確認できた長さは 63.5 m である。柱穴は 4 基とも柱抜き取りの痕跡が確認でき、この棚は人為的に棄却されたものである。また、抜き取った後の埋土からは焼土が出土しており、棚の棄却と何らかの関連があるものと考えられる。このほかに出土遺物として、土師器破片、黒色土器底部片、信楽窯跡部片、鉄釘が出土している。時期は、信楽の窯の破片が出土しているので、15世紀以降である。しかし、焼土を出土する他の遺構との関連から16世紀中葉に限定できよう。

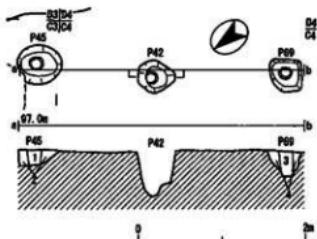
2) 棚 SA02

棚 SA02 は C3, C4 区に位置する。条里方位と直交する方位を持つ。直径 42～50 cm の円形の柱穴 3 基（北から P45, P42, P60）が 1.5 m 間隔で並ぶ。南北ともこれに続く柱穴はない。しかし、これを据立柱建物の西面とみれば、建物が東側の調査区外に広がっている可能性は十分ある。将来的に据立柱建物跡になる可能性を持つ遺構である。柱穴からは直径 20 cm ほどの柱当りが確認されている。



第7図 棚 SA01 平面図・断面図 (1/60)

1. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (10YR5/3 にぶい黄褐色砂泥ブロック、土器片、炭化粒、焼土粒を含む)
2. 5Y6/1 灰色砂泥
3. 5Y6/2 土オーリーブ色砂泥
4. 2.5Y3/2 黑褐色砂泥 (炭化粒、焼土粒、土器片を含む)
5. 5Y6/1 灰色砂泥
6. 5Y5/3 土オーリーブ色砂泥
7. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (炭化粒、焼土粒、土器片を含む)
8. 5Y4/2 土オーリーブ色砂泥 (5Y6/2 土オーリーブ色砂泥ブロック、炭化粒、焼土粒を含む)
9. 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥 (10YR6/4 にぶい黄褐色砂泥ブロック、炭化粒、焼土粒、土器片を含む)
10. 5Y4/2 土オーリーブ色砂泥 (2.5YR6/4 にぶい黄色砂泥ブロック、炭化粒、焼土粒、土器片を含む)
11. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (2.5YR6/4 にぶい黄色砂泥ブロックを含む)



第8図 棚 SA02 平面図・断面図 (1/60)
1. 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 2. 5Y5/2 灰オーリーブ色砂泥 3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂泥 4. 5Y4/2 灰オーリーブ色砂泥

水があったと考えられる。したがって SD03 は南から北にむかって水を流す溝であったといえる。

出土遺物には土師器皿口縁部・壺胴部、須恵器杯H・杯口蓋・壺胴部・壺底部、灰釉陶器壺胴部片、信楽壺胴部片、焼土がある。所属時期については、遺構の切り合いも考慮に入れれば16世紀末以降の時期が考えられよう。

4) 井戸 SE01

井戸 SE01 は C2, C3 区に位置する直径 189 cm の円形の井戸である。深さは 130 cm を測る。この井戸の底面にはにぶい黄褐色泥砂層を掘り込んでいるが、この層は礫を多く含み現在でも水気を帯びており、この層が湧水層と考えられた。埋土は 7 層に細分されるが、第 7 層が井戸の機能時の堆積層、第 6 層以上が埋没時の土層である。第 5 層、第 6 層はともに下部に礫を多く含み、ブロック土を含んでいることから、人為的に埋められたものとみられる。井戸枠など井戸に関する施設は認められず、また、再掘削などの痕跡もなかったことから素掘り井戸と考えられる。

遺物については第 1 層から土師器皿、須恵器壺胴部片が出土している。土師器皿は15世紀末のものと考えられ、したがってこの井戸の埋没時期はこの時期と考えられる。

5) 井戸 SE02

井戸 SE02 は A1, A2 区に位置する長辺 312 cm、短辺 154 cm の方形の井戸である。深さは 145 cm である。埋土は 6 層に分けられるが、このうち第 1 層から第 3 層までは井戸の埋没時の埋土、第 4 層から第 6 層は井戸設置時の埋土である。井戸枠は確認できなかったが、第 1 ~ 3 層が埋める空間は 80 ~ 100 cm の垂直に立つ円筒形を呈しており、井戸枠がなければできないような形態をしている。したがってこの円筒形の外周を巡るような井戸枠を想定することができる。また、井戸底面からは近世以降の瓦片が出土し、この井戸の時期もその時期と考えられる。そうすれば垂直に立つような井戸の壁も理解しやすく、あるいは現代にかなり近い時期の井戸ではないかとも思われる。

6) 土坑 SK01

土坑 SK01 は C5, C6 区に位置する。長さ 382 cm、幅 159 cm を測る。1 基の土坑として登録されているが、実際は一辺 150 cm の方形の土坑が 2 基東西に隣接して切り合っている。西側の土坑が先行し、続いて東側の土坑が掘り込まれている。どちらも深さ 45 cm で断面形は底面が広く壁が垂直に近く立ち上がる逆台形である。埋土は東側、西側とも 2 層に分けられる。どの層でも地山ブロックを含んでおり、掘り込んだ後すぐに埋め戻したと考えられる。また、埋土は全体的に焼土、炭化物、拳大の礫を比較的多く含んでいた。東側の土坑では北壁に沿って焼土の集中が 2 ヶ所みられた。

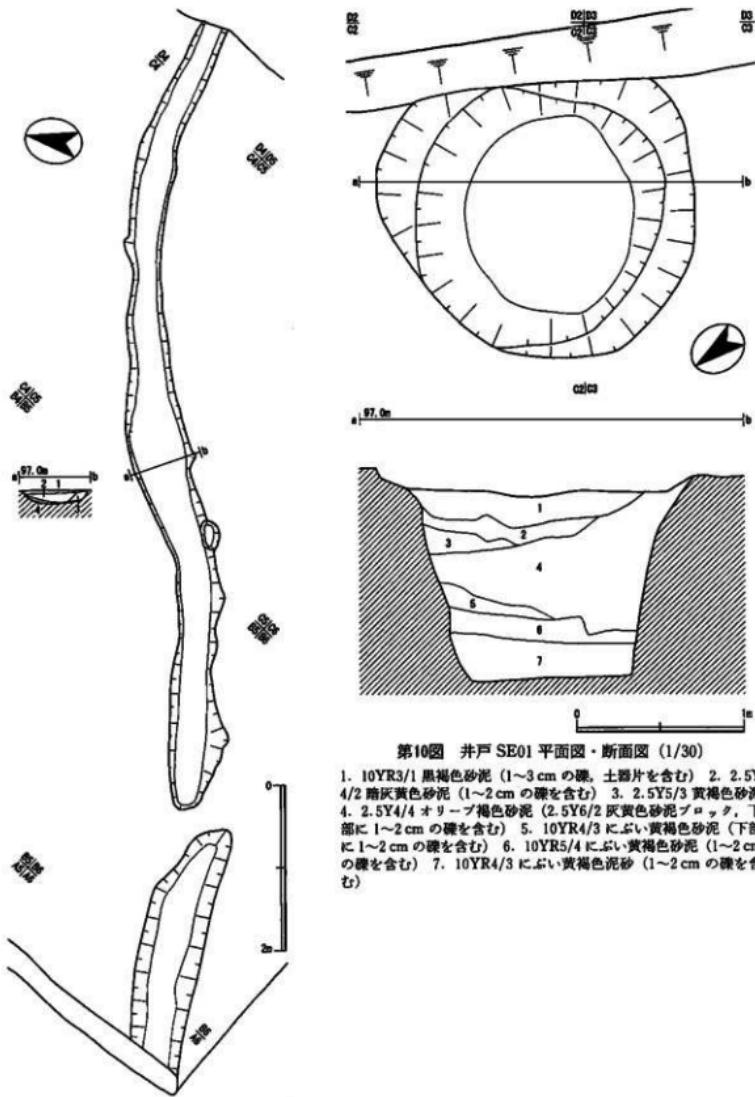
出土遺物は多い。土師器皿・羽釜、須恵器杯・壺胴部片、信楽壺・擂鉢、瀬戸美濃焼破片、瓦質土器鉢脚部、

出土遺物には土師器皿口縁部、須恵器杯H底部破片・すり鉢口縁部片・壺胴部片、鐵鋸、鐵釘、焼土が出土している。土師器皿が15世紀末~16世紀前葉に属し、遺構もこの時期に形成されたと考えられる。

3) 溝 SD03

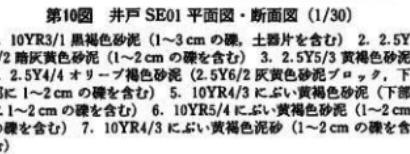
溝 SD03 は A5, B5, B6, C4, C5, D4 区に位置する。条里方向とは関係なく正方位のはば南北方向に延びる溝である。A5 区・B5 区では土坑 SK08 を切っている。幅 33 ~ 75 cm、深さ 5 ~ 25 cm で、断面は浅い皿状を呈する。底面レベルは南から北にむかって低くなる。埋土は 4 層に細分されるが、底面直上の第 4 層 (10YR5/1 褐灰色砂泥層) は砂が多い砂泥であり、マンガンの沈着がみられることから、この溝に流水があったと考えられる。したがって SD03 は南から北にむかって水を流す溝であったといえる。

出土遺物には土師器皿口縁部・壺胴部、須恵器杯H・杯口蓋・壺底部、灰釉陶器壺胴部片、信楽壺胴部片、焼土がある。所属時期については、遺構の切り合いも考慮に入れれば16世紀末以降の時期が考えられるよう。



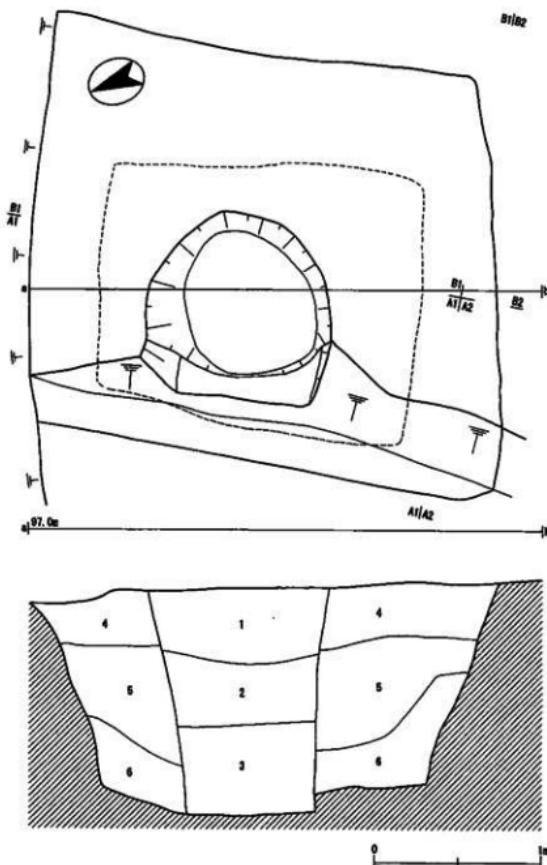
第9図 溝SD02 平面図・断面図 (1/60)

1. 2.5Y6/1 黄褐色砂泥（土器片、マンガン粒を含む）
2. 2.5Y4/2 踏灰黄色砂泥（マンガン粒を含む）
3. 10YR4/1 暗灰色砂泥（10YR3/2 黑褐色砂泥ブロックを含む）
4. 10YR5/1 暗灰色砂泥（マンガンが沈着）



第10図 井戸SE01 平面図・断面図 (1/30)

1. 10YR3/1 黒褐色砂泥（1~3 cm の礫、土器片を含む）
2. 2.5Y4/2 踏灰黄色砂泥（1~2 cm の礫を含む）
3. 2.5Y5/3 黄褐色砂泥
4. 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥（2.5Y6/2 暗黄色砂泥ブロック、下部に 1~2 cm の礫を含む）
5. 10YR4/3 にぶい 黄褐色砂泥（下部に 1~2 cm の礫を含む）
6. 10YR5/4 にぶい 黄褐色砂泥（1~2 cm の礫を含む）
7. 10YR4/3 にぶい 黄褐色泥砂（1~2 cm の礫を含む）

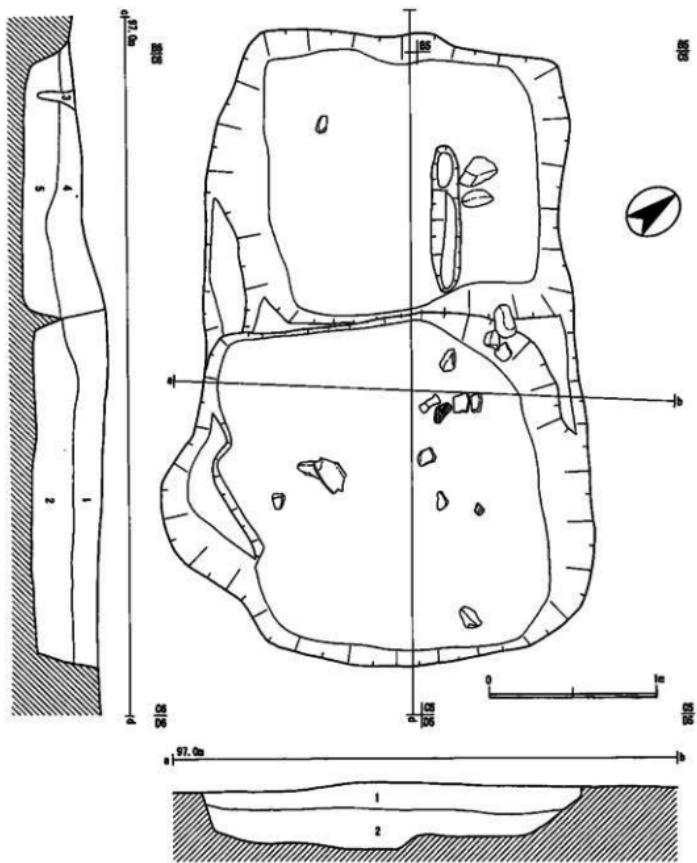


第11図 井戸SE02 平面図・断面図 (1/30)
 1. 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (1~2 cm の礫を含む) 2. 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 (10YR5
 4/4 K-5) 黄褐色砂泥ブロック, 1 cm 以下の礫を含む) 3. 2.5Y5/3 黄褐色砂泥 4.
 2.5Y5/2 灰灰黄褐色砂泥 (1~2 cm の礫を含む) 5. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (5Y
 5/1 灰色砂泥ブロック, 1~2 cm の礫を含む) 6. 10YR5/2 灰黄褐色砂泥 (1~2 cm
 の礫を含む)

青磁皿底部、平瓦片、鉄釘が出土している。

遺物は基本的に破片資料ばかりであり、すぐに埋め戻した状況からもこの2基の土坑はどちらも廃棄のための土坑であったと考えられる。

所属時期は出土した土器器皿に16世紀中葉に属するものがある。信楽窯と播鉢は16世紀前半に属する。この土坑の時期は16世紀中葉にはば限定できよう。そして、この二つの土坑は時をおかずして続けて掘り込まれたものと考えられる。



第12図 土坑SK01 平面図・断面図 (1/30)

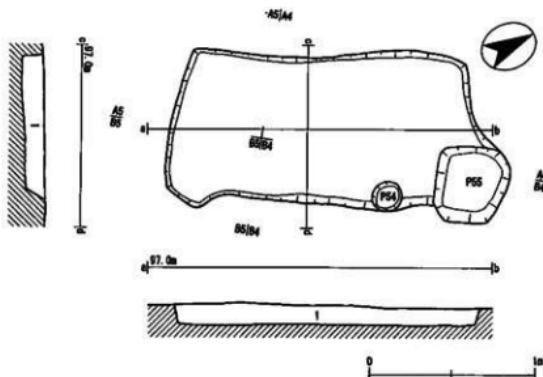
1. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック, 烧土粒, 炭化粒, 土器片, 3~5 cm の礫を含む) 2. 10YR3/3 暗褐色砂泥 (10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロック, 烧土粒, 炭化粒, 土器片を含む) 3. 10YR5/2 暗黄褐色砂泥 (10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロックを含む) 4. 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥 (烧土粒, 炭化粒, 土器片, 3~5 cm の礫を含む) 5. 10YR4/2 暗黄褐色砂泥 (烧土粒, 炭化粒, 土器片を含む)

7) 土坑 SK02

土坑 SK02 は A4, A5, B4, B5 区に位置する。長さ 192 cm, 幅 99 cm の長方形の土坑である。深さは 13 cm で断面形は底面が広く壁が垂直に近く立ち上がる逆台形を呈する。この土坑は P 53, P 54 を切り, P 55 に切られる。埋土は 1 層のみである。出土遺物には須恵器要洞部片, 信楽要洞部片, 近世の平瓦がある。近世の遺物を含むことから近世の所産と考えられる。

8) 土坑 SK03

土坑 SK03 は C3 区に位置する。長径 108 cm, 短径 93 cm の橢円形の平面形を呈する。この長軸の方向は



第13図 土坑 SK02 平面図・断面図 (1/30)
1. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (燒土粒, 炭化物, 土器片を含む)

柵 SA02 と同じく、条里の東西方向と一致する。深さは 81 cm で、断面形は底がやや南に傾った逆V字形を呈する。この土坑は柵 SD02、柵 SA02 のピット P 45 を切って掘られている。したがって、これらよりも後世の遺構である。埋土は灰色砂泥層の 1 層のみであるが、ブロック土を含み人為的に埋め戻されている。出土遺物には土師器皿・甕、須恵器杯 H・甕、近世瓦、鉄釘、焼土がある。須恵器は SD02 からの混入であろう。近世の遺物があることから、近世の遺構と考えられる。

9) 土坑 SK04

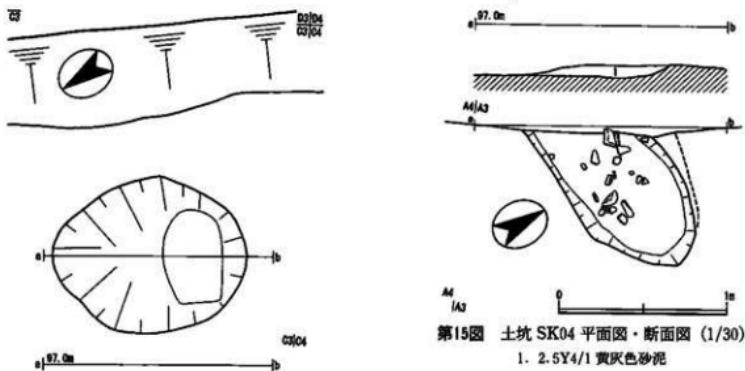
土坑 SK04 は A3 区に位置する。西半は調査区外に伸びるが長径 118 cm 以上、短径 93 cm の橢円形を呈すると考えられる。長軸の方針は正方位の南北方向であり、柵 SD03 と方位が共通する。深さは 6 cm で断面浅い皿状を呈している。埋土は黄灰色砂泥の 1 層のみである。出土遺物には土師器甕・壺・高杯、須恵器杯 H・杯 H 盖・甕、砥石片がある。この遺物は 6 世紀後半から 7 世紀前半までの時期幅を持ち、1 時期のものとは考えにくい。調査区より北約 200 m のところに位置する守山小学校では、明治時代守山小学校（当時の尋常小学校）を開設する際に古墳を破壊したといわれており、周辺に古墳群があった可能性がある。したがって、この遺物群も古墳に関連したものと考えれば、理解しやすいであろう。

また、この土坑は柵 SD02 を切って掘り込まれている。掘り込み面のレベルは O.P. 96.8 m と比較的高いレベルである。また、この土坑の方針は SD03 と同じである。以上のことから、新しい時期の遺構で、おそらく柵 SD03 と同時期ではないかと考えられる。

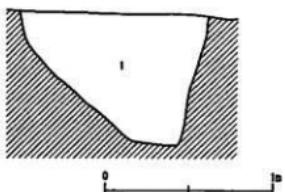
10) 土坑 SK08

土坑 SK08 は B5、B6 区に位置する。長さ 142 cm、幅 134 cm の方形の土坑である。この遺構の方向は条里方向と一致している。深さは 43 cm で断面形は底面が広く壁が垂直に近く立ち上がる逆台形である。土坑北端はまず P 73 に掘り込まれ、それが埋められた後、次に甕埋え付け遺構 SX01 が作られている。また、南側は柵 SD03 によって一部切られている。埋土は 4 層に分けられるが、どの層でも地山ブロックを含んでおり、掘り込んだ後すぐに埋め戻したと考えられる。また、埋土は P 73 には拳大の礫を多く含んでいた。

出土遺物には土師器皿・甕、須恵器杯 H・杯 H 盖・甕・銅部片、黒色土器底部片、信楽甕・銅部片・擂鉢・銅部片、砥石、鉄釘、焼土が出た。時期決定の手がかりになる遺物は僅少であるが、土師器皿は 15 世紀末～16 世紀前葉、信楽甕・擂鉢は 16 世紀前半に属する。遺構の形態や方向は SK01 とよく似ているが、所属時期は



第15図 土坑 SK04 平面図・断面図 (1/30)
1. 2.5Y4/1 黄灰色砂泥



第14図 土坑 SK03 平面図・断面図 (1/30)
1. 5Y4/1 灰色砂泥(燒土粒, 炭化粒, 5Y6/3 オリーブ黄色砂泥ブロック, 10YR6/6 明黄褐色砂泥ブロックを含む)

SK01 よりも古く、15世紀末～16世紀前葉と考えられる。

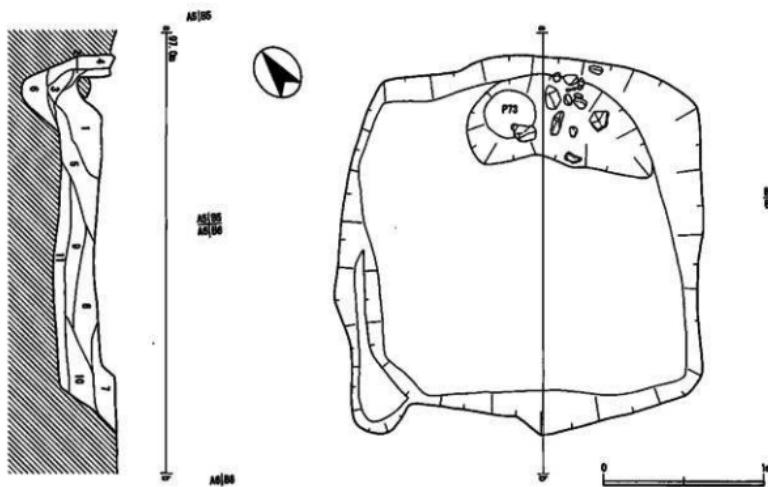
11) 離据え付け遺構 SX01・SX02

今回の調査では信楽の甕の底部がピットに据えられた状態で検出された遺構が2基あった。甕を据えるために地面を少し掘りくぼめ、甕を置いて固定したものである。これらを離据え付け遺構として報告する。SX01とSX02である。ともにB5区に位置する。

SX01は直径62cm、深さ18cmの円形のピットに信楽の甕が据えられていた。甕は底部のみであり、高さ14.8cm残存していた。甕の内部は焼土が詰まっていた。ピットの埋土は黄灰色砂泥であった。信楽甕のはかに土師器片、白磁腰折杯、瀬戸美濃灰釉鉢底部が出土している。

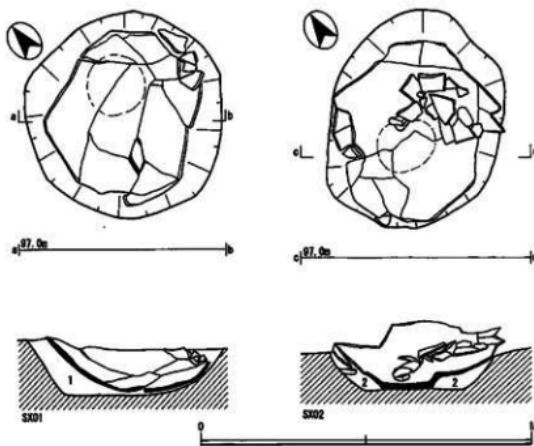
SX02の場合、直径73cm、深さ13cmの円形のピットに信楽の甕が据えられ、甕は底部のみで高さ21.7cm残存していた。甕の内部にはおそらく同一個体になる信楽甕の口縁部から肩部が落ち込んだ状態で見つかった。甕の内部、ピットの埋土とも黄灰色砂泥であった。信楽甕のはかに土師器片がわずかに出土している。

これらの時期について同一時期ではなく、時期差があると考えられる。SX02は甕の口縁部は木戸編年のKB6類で16世紀前半のものであり、埋土には焼土粒を含まないことから、遺構は16世紀前半に位置付けられる。SX01についてはSK08を切っており、16世紀の白磁腰折杯、瀬戸美濃灰釉鉢底部があり、焼土で埋まっているのでSK01と並行する時期、すなわち16世紀中葉の遺構であろうと考えられる。



第16図 土坑 SK08 平面図・断面図 (1/30)

1. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (燒土粒、炭化物、土器片、10~20 cm の石を含む)
 2. 2.5Y4/1 黄灰色砂泥 (2.5Y6/4 に
 ふい黄色砂泥ブロックを含む)
 3. 2.5Y5/2 薄暗黄色砂泥
 4. 5Y5/2 灰オリーブ色砂泥 (5Y6/3 オリーブ黄色砂泥
 ブロックを含む)
 5. 5Y4/2 灰オリーブ色砂泥 (2.5Y5/2 黄褐色砂泥ブロックを含む)
 6. 2.5Y4/1 黄灰色砂泥
 7. 5Y6/1 灰オリーブ色砂泥 (2.5Y5/6 黄褐色砂泥ブロック、炭化粒、マンガン鉱を含む)
 8. 10YR5/1 暗灰色砂泥 (2.
 5Y5/4 黄褐色砂泥ブロック、焼土粒、炭化物、土器片を含む)
 9. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥 (2.5Y6/4 に
 ふい黄色砂泥
 ブロック、炭化粒を含む)
 10. 10YR5/1 暗灰色泥土
 11. 5Y5/1 灰色砂泥



第17図 壁据え付け遺構 SX01・SX02 平面図・見透し図 (1/15)

1. 2.5Y5/1 黄灰色砂泥
 2. 2.5Y6/1 黄灰色砂泥

第4章 出土遺物

出土遺物は全体でコンテナ箱にして9箱分出土した。以下、種別に詳細を述べる。

第1節 弥生土器 (図版2, 第5表参照)

1は弥生土器の甕の口縁部である。近江型の受口型甕である。口縁部の立ち上がりがやや弱く、外反している。全体に摩滅しており、細かな分析に増えられないが、弥生時代後期後葉のものであろう。溝SD03出土であるが、後世の混入である。

第2節 土師器 (図版2・12上, 第5表参照)

2～7までの6点が出土しているが、すべて後世の遺構に混入した資料である。甕、壺、高杯がある。

1～5は甕である。2・3は近江型の受口型甕の口縁部で、弥生時代の受口型甕と比べ、口縁部の屈曲がかなり弱くなっている。また、口唇を面取りしている。口縁部の形態から畿内布留1～2式併行期のものであろう。4・5はくの字型口縁の甕である。4は全体が摩滅して調整などはよくわからない。所属時期は6世紀のものであろう。5は長胴化する直前の甕である。これも全体に摩滅して調整などは不明である。6世紀後半のものである。

6は壺の口縁部である。外に直線的に開きながら立ち上がる。直口壺の口縁部である。6世紀代のものであろう。

7は高杯の脚部である。上端より1.7cm下がったところに杯部との接合痕が一周する。この上端が杯部に埋め込む形の高杯である。内部は棒状工具で押された痕跡が認められる。5世紀から6世紀のものであろう。

第3節 土師器（中世）(図版2・12下, 第5表参照)

皿、鍋、羽釜が出土している⁽¹⁾。

8～15は皿である。8は小皿である。法量から京都X期に併行すると考えられる。溝SD03から出土した。9は小皿である。胴部下位に指頭圧痕が残る。京都X期新に併行すると考えられる。井戸SE01から出土した。10～15は中皿である。10・11は胴部下位が押さえられ、中位より外反する。京都X期古に併行すると考えられる。12～14は厚みがやや増し、屈曲があるが弱く、全体として比較的滑らかな立ち上がりを呈する。京都X期中に併行すると考えられる。15は京都X期古に併行すると考えられる。10はP45, 11は土坑SK08, 12は溝SD01, 13・14は土坑SK01, 15はP13からの出土である。

16は器種不明の口縁部である。直線的に外に開く器形である。外面・内面ともに斜位または横位のナデで、指頭圧痕が顯著に残る。

17は羽釜の口縁部から胴部である。口縁部はやや内傾し、鉢もやや短い。鉢部より下の外面の調整は横位のケズリ、内面は横位のナデである。外面には焼がかなり付着している。16世紀代のものである。

第4節 須恵器 (図版2・3・12上, 第5表参照)

杯B, 杯H, 杯H蓋, 鉢, 高杯, 提瓶 (?), 壺が出土している⁽²⁾。

18~22は杯H蓋である。18は天井部と口縁部の境に稜を持ち, ほかの資料よりも古い。陶邑田辺編年のMT15型式に併行するものと考えられる。6世紀初頭のものである。土坑SK03より出土した。18・19も天井部である。天井部は回転ヘラケズリが施される。陶邑田辺編年のTK10型式に併行するものと考えられる。6世紀後半のものである。19は土坑SK03より, 20は土坑SK08より出土した。21・22は口縁部である。ほとんどロクロナデにより整形されている。陶邑田辺編年のTK217型式に併行するものと考えられる。7世紀前半のものである。21は溝SD03, 22は土坑SK04より出土した。

22~27は杯Hである。23は口縁部の立ち上がりが垂直に近く, このなかでも古相を示す。口径はやや小さいがおそらく陶邑田辺編年のTK209型式に併行するものと考えられる。6世紀末のものであろう。土坑SK04より出土した。24・25は口縁の立ち上がりが粗雑であり, 直線的に短く内傾している。また, 脚部外面はロクロナデのみで, 底部は静止ヘラケズリを残したものである。陶邑田辺編年のTK217型式に併行するものと考えられる。7世紀前半のものである。24・25とも溝SD02より出土した。26・27は杯Hの底部である。これも25と同様, 脚部外面はロクロナデのみで, 底部は静止ヘラケズリを残したものである。陶邑田辺編年のTK217型式に併行するものと考えられる。7世紀前半のものである。26は土坑SK04, 27は土坑SK03より出土した。

28は杯Bの底部である。奈良時代, 8世紀のものである。SD02より出土した。

29は鉢の口縁部である。脚部中位に沈線が2条めぐる。P60より出土した。

30・31は高杯である。30は高杯部の底部である。内面・外面ともロクロナデによって仕上げられている。31は高杯の脚部である。脚部中位に沈線が1条以上めぐる。ともに陶邑田辺編年のTK217型式に併行するものと考えられる。7世紀前半のものである。30は土坑SK01, 31は溝SD02より出土した。

32は提瓶あるいは長頸壺の頸部とみられる。頸部中位に沈線が2条めぐる。陶邑田辺編年のTK217型式に併行するものであろう。溝SD02より出土した。

33は壺の底部である。断面長方形の高台が付く。この高台はやや外に開きふんばっている感がある。高台の直径や形態から台付長頸壺と考えられる。

34~45は壺の脚部の破片である。時期は特定できないが6世紀以降であることは確かである。

第5節 黒色土器・瓦質土器 (図版4・12下, 第5表参照)

黒色土器鉢, 瓦質土器鉢が出土している。

54は黒色土器鉢の口縁部である。口縁内面を沈線が一周する。全体に摩滅しており, 内面・外面ともヘラミガキがわずかに残る。12世紀前葉のものであろう。土坑SK01より出土した。

49は瓦質土器鉢の口縁部である。口唇部は肥厚し丸く収めている。外面は脚部横位のヘラケズリ, 内面は横位の刷毛目である。井戸SE02より出土した。混入であろう。

53は瓦質土器鉢の脚部である。短い円錐状の脚で内部は空洞になっている。脚部の接合部に型の痕跡らしき沈線が断続的に認められ, 型で作ったと考えられる。外面は摩滅が著しいがヘラミガキが若干残っている。脚部内面はへら状工具で整形のため断続的に削ったあと, ヘラミガキが施されている。このような脚部の瓦質土器鉢の類例は僅少であるが, 奈良県法貴寺遺跡で西大溝から出土している⁽³⁾。土坑SK01より出土した。

第6節 陶 器 (図版4・12下・13, 第5表参照)

縁釉陶器碗, 灰釉陶器碗, 信楽の甕, 摺鉢, 濱戸美濃の鉢が出土した(4)。

46・47・48・51は信楽の甕である。46は口縁部から胴部中位の破片である。外に折り曲げて成形した口縁部は内面に幅広で浅い凹線が一条巡る。口縁はやや外反し、また、口唇はさらに外につまみ出されている。木戸編年のKB6類で16世紀前半に位置づけられている。51の口縁部も同様である。

47・48は甕の底部である。47は外面縦位の板ナデ、内面はヨコナデで整形されている。底部近くの胴部に蔓弓による引き上げの痕跡が残っている。48は大きく焼け歪んだ個体である。外面は縦位の板ナデないし横位のナデ、内面はヨコナデで整形されている。この個体にも底部近くの胴部に蔓弓による引き上げの痕跡が残っている。46・48は甕据え付け造構SX02、47は甕据え付け造構SX01、51は土坑SK01より出土した。

50・52は信楽の摺鉢である。50は胴部が直線的に外に開きつつ立ち上がり、口縁部では口唇が外にややつまみ出されて受け口状を呈している。内面・外面ともロクロナデで調整されており、摺り目は5条単位で4ヶ所以上つけられている。底部近くの胴部外面に蔓弓による引き上げの痕跡が残っている。木戸編年のB6類で16世紀前半に位置づけられる。52は摺鉢の胴部破片である。直線的に外に開く器形とみられる。摺り目は1本単位でつけられている。木戸編年のB4類で15世紀前半に位置づけられる。50・52とも土坑SK01より出土した。52は混入とみられる。

55は濱戸美濃の灰釉鉢の底部である。ロクロナデにより整形されており、内面・外面とも底部以外に施釉されている。釉はオリーブ灰色の灰釉で貯入がある。甕据え付け造構SX01より出土した。

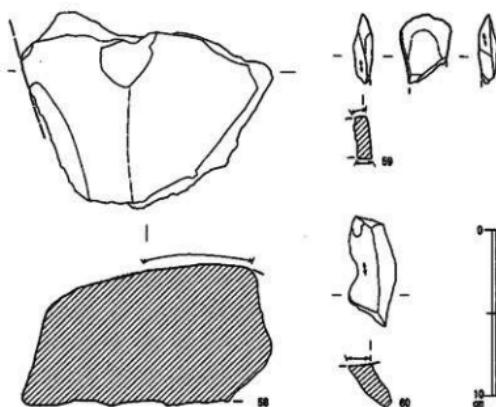
このほか縁釉陶器碗の胴部破片、灰釉陶器碗の胴部破片が出土している(図版13の66・67)。縁釉陶器碗の胴部破片(66)は硬陶の縁釉陶器で、外面回転ヘラケズリの後、内外面とも施釉されている。釉は薄い緑釉である。10世紀以降のものである。土坑SK01より出土。混入したものである。灰釉陶器碗の胴部破片(67)は内面ロクロナデ、外面回転ヘラケズリで内面のみに施釉されている。釉は灰釉で貯入が若干みられる。これも10世紀以降のものである。溝SD03より出土しているが、これも混入である。

第7節 磁 器 (図版4・12下, 第5表参照)

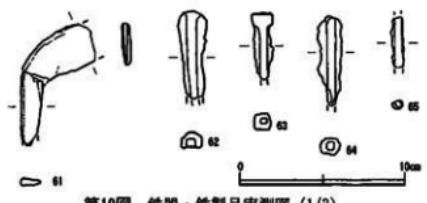
白磁杯、青磁皿が出土している。

56は白磁の腰折杯である。腰部に屈曲があるが、それより上部はゆるやかに外反する。内面はロクロナデ、外面は回転ヘラケズリが施された後静止ヘラケズリにより八角形に成形されている。内外面とも施釉されるが、外面は腰部まである。釉はやや青味がかった白磁釉である。貯入はない。16世紀代のものである。甕据え付け造構SX01より出土した。

57は同安窯系青磁皿の底部である。底部内面には片切り彫りによる曲線文、櫛齒状工具によるジグザグ文が施される。内外面とも施釉され



第18図 石器・石製品実測図 (1/3)



第19図 鉄器・鉄製品実測図(1/3)

存していると思われる。偏平な自然礫の片面、高く盛上がった部分を使用しており、そこに磨面が残っている。石質は花崗岩質である。溝 SD02 の下層から出土した。

59・60は砾石の破片である。59は両面使用している。60は片面しか残存していないが、その面を砾石として使用している。ともに石質は粘板岩である。59は土坑 SK04、60は土坑 SK08 出土である。

るが、底部外面は露胎である。土坑 SK01 より出土した。

第8節 石器・石製品 (第18図、第3表参照)

石皿と砾石が出土している。

58は無縫石皿の破片である。おそらく1/6残

第9節 鉄器・鉄製品(第19図、第4表参照)

鉄鎌と鉄釘が出土している。

61は鉄鎌である。先端が欠け、刃部の約1/3と柄部が残っている。柄は痕跡もないことから、当初からない状態で埋まつたものとみられる。P 45から出土した。

62～65は鉄釘である。このうち62・63は頭部が残存している。62は側面からみればやや広がった殷形の頭部を呈している。63は側面からみれば四角形の頭部、つまり丁字形に作られている。ともに先端は欠損している。64・65はともに頭部、先端部とも欠損している。4点いずれも断面は四角形であり、近世以前の古い形態を持っている。

註

(1) 中世の土師器皿の編年については中世京都の影響が極めて強い地域性を考慮して、近年の中世京都の編年研究(小森俊寛・上村憲章『京都の都市遺跡から出土する土器の編年研究』(財団法人京都市埋蔵文化財研究所編『研究紀要』3所収、京都、平成7年))を参考した。

(2) 須恵器の編年については田辺昭三『須恵器大成』(東京、昭和56年)に準拠した。

(3) 今尾文昭・田中一廣『田原本町法貴寺遺跡発掘調査概報』(奈良県造跡調査概報 1986年度)所収、権原、昭和62年)。

今尾文昭『大和・中世村落における瓦質土器』(中世土器の基礎研究)6掲載、高柳、平成2年)。

(4) 信楽の編年については木戸雅寿『中世陶器(信楽)』(中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』所収、平成7年)に準拠した。

第5章 考 察

第1節 勝部西浦遺跡における遺構の変遷と出土遺物（第20図参照）

今回の調査は約 300 m² と狭い範囲の発掘調査であったが（第20図A），飛鳥～奈良時代，室町時代後期～江戸時代前期と大きく2時期にわたる遺構と弥生時代後期，古墳時代前期，古墳時代後期，飛鳥～奈良時代，平安時代前期，平安時代後期，室町時代後期～江戸時代前期の遺物が出土した。ここでは遺構の変遷を中心に整理し，あわせて二次堆積の遺物は，その出土遺構ごとにまとめるところにする。

I期（飛鳥～奈良時代）

遺構

条里地割と同じ方位を持つ溝 SD03 がある。

出土遺物

8世紀の須恵器杯B（SD03上層出土遺物）

7世紀前半の須恵器杯H・杯H蓋・高杯・提瓶（？）・甕・石皿（SD03下層出土遺物）

II期（室町時代後期～江戸時代前期）

この時期は遺構の切り合いからさらに3時期に細分できる。

第1段階（15世紀末～16世紀前葉）

遺構

柵 SA02，井戸 SE01，土坑 SK08，壠堀え付け遺構 SX02

出土遺物

一次堆積：土師器皿・信楽甕・播鉢・砥石・鐵鏹・鐵釘

二次堆積：土師器甕・須恵器杯H・杯H蓋（TK10型式）・甕・瓦器碗

第2段階（16世紀中葉）

遺構

柵 SA01，土坑 SK01，壠堀え付け遺構 SX01

出土遺物

一次堆積：土師器皿・羽釜・瓦質土器鉢・信楽甕・播鉢・瀬戸美濃灰釉鉢・白磁腰折杯・青磁皿・平瓦・

鐵釘・燒土

二次堆積：須恵器杯H（TK217型式）・すり鉢・甕・綠釉陶器碗・瓦器碗

第3段階（16世紀末～17世紀前葉）

遺構

溝 SD03，土坑 SK03，土坑 SK04

出土遺物

一次堆積：土師器皿・砥石

二次堆積：弥生土器甕・土師器甕・壺・高杯・須恵器杯H（TK209型式・TK217型式）・杯H蓋（MT

15型式・TK10型式・TK217型式）・甕・壺・灰釉陶器碗

第2段階は多量の焼土が，第3段階は二次堆積遺物が豊富であることが特徴である。

次に周辺の発掘調査事例を同様にまとめ，今回の調査との関連をみてみる。

1. 女天神遺跡（第20図1）⁽¹⁾

平成8年に市立守山小学校体育館新築に伴いグラウンド内にて発掘調査が行われた。古墳時代前期のピット，



第20図 勝部西浦遺跡とその周辺における遺構の分布 (1/2500)
(番号は本文参照)

の時期は遺物が量的に多く主体を占める奈良時代後半と考えられ、それ以外の遺物は混入と考えられている。

なお地元では、この調査区周辺で昭和初期に大規模な地下げ(削平)が行われたといわれている。

この溝2の方位は今回調査のSD03の方位とはほぼ一致する。また、溝2の出土遺物の様相と今回調査のSD03の様相が近い。この2点から、溝2と今回の調査のSD03とは同時に形成され、同じような埋没過程をたどった可能性が指摘できる。

以上から勝部西浦遺跡とその周辺について、次のようにまとめられよう。

I期

条里地割と同じ方位を持つ溝SD02が掘削される。この溝は流水の痕跡が認められないことから区画溝など境界表示のための溝であろう。2度の掘り直しがあり、8世紀までは機能していたが自然埋没している。この時期の遺構は周辺には存在しないので、これ以上のことはわからない。

古墳時代後期の柱穴、室町時代の溝が見つかっている。ここでは古墳時代の遺構はごく少数で、室町時代(信楽焼を含む時期)に大規模に削平されている。

古墳時代前期・後期の遺構があることは今回の調査で出土した当該期遺物の故地の1つとして考えることができよう。また室町時代に削平されていることは、今回の調査でⅡ期に古墳時代の遺物が二次堆積することとの関連が指摘できる。

2. 本像寺遺跡(第20図2)⁽²⁾

平成10年個人住宅の建て替えにより発掘調査が行われた。近世のピットが多数見つかった。ここからは焼土粒、炭などが遺構面に広がっており、ピット埋土にも含まれていた。近世の集落の一部で、火災があった可能性が考えられている。しかし、これは今回の調査で焼土粒が多く出土することとは時期が異なり、関連しないと考えられる。

3. 勝部遺跡(第20図3)⁽³⁾

昭和55年住宅建設に伴い発掘調査が行われた。溝2条、土坑2基、ピット4基がみつかったが、遺物を出土し、時期が判断できるものは溝1条のみである。

溝2は調査区の中央を東西に流れる溝である。土器器杯A・杯B・椀A・皿A・甕、須恵器杯H・杯H蓋・杯A・杯B・杯B蓋・皿A・甕・壺・平瓶。灰釉陶器碗が出土した。遺物の時期は7世紀から10世紀にかけてのものであるが、遺構

II期

第1段階

柵 SA02、井戸 SE01、土坑 SK08、甕堀え付け造構 SX02 が形成される。柵 SA02、土坑 SK08 は条里地割と同じ方位を持つ。柵 SA02 は東西様の西壁にあたる可能性があり、もしうだとすれば井戸 SE01 とセットになることが考えられる。ただし井戸 SE01 はこの段階の早い時期に埋没している（15世紀末）。また、古墳時代の遺物は II 期を通じて二次堆積するが、この時期の前、あるいはこの間で女天神遺跡周辺の削平が行われたのであろう。

第2段階

柵 SA01、土坑 SK01、甕堀え付け造構 SX01 が形成される。この時期の造構は埋土に多量の焼土粒を含むことが特徴である。また、柵 SA01 はこの時期に抜かれて埋められているよう、抜き取り跡から焼土粒が出土している。また、甕堀え付け造構 SX01 も多量の焼土粒によって埋められていた。また、この段階の出土土器・陶磁器は供膳具・煮沸具・貯蔵具・調理具がそろっており、生活の場が火災に遭った可能性を示しているといえる。そして、この周辺の調査事例からは同時期の火災の痕跡は見つかっておらず、今回調査区周辺の小範囲の火災であったと考えられよう。

第3段階

溝 SD03、土坑 SK03、土坑 SK04 が形成される時期である。この時期の造構には弥生時代から平安時代の遺物がまとまつて二次堆積の状態で出土していること、地割が大きく変更されることが特徴である。

遺物の出土状況について、土坑 SK04 から出土した土器群は報告の中でも指摘したように古墳に供獻された土器である可能性がある。数型式にまたがる土器群であり、これらの土器群は数基の古墳、ないし横穴式石室の古墳が破壊されて二次堆積した可能性がある。また、灰釉陶器はこの付近に平安前期の政治的拠点となるような集落が存在した可能性を含んでいよう。

周辺の遺跡をみれば勝部西浦遺跡周辺では、南東側の JR 守山駅付近は吉身北遺跡・吉身南遺跡といい、古墳時代後期の集落跡である。ここでは 5 世紀末から集落が営まれはじめるが、微高地中央には集落、縁辺部には墓域が広がっていた。勝部西浦遺跡周辺はこの吉身北遺跡の縁辺部であり、墓域であったことが推測できる。

今回の調査区の西、約 120 m の地点における勝部遺跡の調査ではこの溝 SD03 と同じ方位を持つ溝（溝 2）が見つかっている。溝 2 からは奈良時代の飛鳥～平安時代の遺物を含むが、それより新しい時期の遺物は見つかっていない。しかし、造構の規模、方位、遺物の出土状況が共通することから、SD03 と同じ性格、形成・埋没過程を持つ溝の可能性が考えられる。

出土遺物に若干の時期差がみられるのは、それぞれの調査区に近接する造構の時期の違いであろう。

従ってこの段階では弥生・古墳時代の遺跡、古墳などがある微高地を削平して、地割を変更し、大規模な土地改変を行ったと推測される。

第2節 7世紀の方格地割の可能性

今回の調査では条里地割と同じ方位を持つ溝 SD02 が確認された。このような溝など地割を示す同様の造構は守山市内では、平成 8 年に古代学研究所が調査した経田遺跡の調査事例がある⁽⁴⁾。ここでは条里地割と同じ方位を持つ 2 本の溝 SD108、SD113 が 6 世紀末以降のある時期に掘削されている。この 2 本の溝には流水の痕跡があり、用水路ではないかと考えられる。そして、これは 6 世紀後半の同様の溝とは方位を変えて新たに掘削されている。

経田遺跡およびその周辺遺跡では、古墳時代後期の溝は見つかっているが平成 8 年古代学研究所調査の 6 世紀後半の溝と方位が近く、条里方位と異なる。また 6 世紀末から 7 世紀の溝は現在のところ見つかっていない。

守山市内ではこのほかに吉身西遺跡、伊勢遺跡などで古墳時代後期の溝が見つかっているが、これらは条里地割とは方位が異なる。

こうしたことから条里地割と同じ方位を持つ遺構は6世紀末以降に勝部西浦遺跡付近と経田遺跡付近という狭い地域の中で施行されたのであろうか。また、溝の平面形態をみれば、直線的に延びる溝である。付近に古墳時代の道などを予想させる遺構、遺跡はないので、おそらく地割の一部ではないかと思われる。

そこで古墳時代後期から飛鳥時代の条里に先行する方格地割について類例には、大阪市長原遺跡第3水田(7世紀中葉～7世紀末)⁽⁵⁾と岡山市津島岡大遺跡古墳時代後期水田⁽⁶⁾の2例があげられる。長原遺跡では正方位の大畦畔と小畦畔があり、そのうち大畦の間隔が113mと条里の109mに近い値である。この大畦畔は坪境畦畔と考えられているが、現行条里的坪境とは一致しない。そして坪内の区画は斜方位小区画の水田が混在するという状況である。また、大畦畔の交点には「富官家」の墨書きした土器が埋納されていた。これは付近に小字「大綱」という屯倉関連地名が残っているなど「ミヤケ」との関係をうかがわせる。この正方位坪境畦畔の出現をこのような国家権力と結び付けて考える向きもある⁽⁷⁾。

2の津島岡大遺跡では第6次、第7次、第9次調査から古墳時代後期において東西方向に直線的に走る溝が掘削され、その南北に正方位区画の水田が広がっていることが明らかになった。この東西溝は、条里的坪境の溝とは一致しない。またこの水田は小区画水田であり、一筆の面積も不揃いである。大区画の畦畔は検出されていない。野崎貴博氏は、周辺の遺跡の調査事例などを含めて検討し、古代の岡山平野では5世紀末～6世紀代にかけて旭川西岸という小地域に正方位方格水田が出現し、7～8世紀に広範囲におよぶ統一的な条里制が施行されるという2段階の土地区画の再編を考えている⁽⁸⁾。

また、現在の地割から条里施工以前の方格地割を検討した研究として次の2つがある。岩本次郎氏は斑鳩地域において6世紀末ないし7世紀初頭に上宮王家主導によって方格地割が導入されていることを明らかにしている。この方格地割はわずかに西偏する方位であるが、これは地形的制約によるものと考えている⁽⁹⁾。また、都出比呂志氏は伝安閑天皇陵古墳周辺に正方位とは軸の異なる方形区画が存在しこれが6世紀前葉まで遡る可能性を指摘している⁽¹⁰⁾。

歴史地理学でも条里地割施行以前の方格地割についての研究がある。千田稔氏によれば、「ミヤケ」「タベ」などミヤケ関係地名は古代の水陸交通系と密接な関係を持ち、景観として条里地割が施工される以前の方格状地割を有する可能性が高いことを明らかにしている⁽¹¹⁾。

以上から条里地割に先行する方格地割について、古くは5世紀末、だいたい7世紀ごろに出現するところがあるといえる。しかし、その広がりは非常に狭い地域である。

そしてそれが導入される地域については、長原遺跡の例や千田稔氏の指摘のように「ミヤケ」に関係する地域である可能性が高い。あるいは上宮王家の斑鳩地域や河内伝安閑天皇陵古墳周辺のように天皇家との関係が深いところもまた同じく指摘できよう。津島岡大遺跡例では古墳時代中期までは大型古墳を造営してきた地域であるが、後期には群集墳や寺院をほとんど造営しないという特異性がみられる。方位については、正方位（長原遺跡、津島岡大遺跡）、斜方位（斑鳩地域、中河内）があり、必ずしも正方位とは限らない。

条里地割との関係を見るとすべて条里地割とは連続しないものである。長原遺跡例、津島岡大遺跡例は、方位は共通するが境界を踏襲しないものである。

このようなことから、守山市内の条里地割と同じ方位を持つ7世紀の溝についてみれば、まず、時期については6世紀末～7世紀初頭という時期であり、斑鳩地域で方格地割が施工された時期と同じである。特に違和感はない。方位についても、わずかに東偏する方位であるが、斜方位の事例があることから問題にならないであろう。

そして「ミヤケ」関連、あるいは天皇家関連の地域かどうかについては、現在のところそれを直接示すような史料はない。しかし、次のように考えることができる。

- 1) 遺跡の所在地は近世まで栗太郡物部村であり、これは古代豪族の物部氏と関係する地名である。そしてここは天平12年の『法隆寺伽藍縦起並流記資財帳』には法隆寺領の「物部郷」として登場する。これは本来物部氏の田荘であった勝部の地は、6世紀末物部氏滅亡後、上宮王家の家産となり、法隆寺の寺領に引き継がれたと考えることができる。上宮王家の家産となった時点で「ミヤケ」と言わされた可能性があろう。
 - 2) 古代東山道に非常に近い。遺跡の北200mのところを走る旧中山道は古代東山道を踏襲している。
- 以上の2点から史料には現れないものの「ミヤケ」である可能性があると考えられる。今現在では発掘調査が少なく明確にとらえられないが、条里地割以前の方格地割が存在する可能性を指摘し、今後の調査に注意を促したい。

第3節 16世紀中葉の火災痕跡について

今回の調査では16世紀中葉の遺構から焼土粒、炭が大量に出土し、火災の痕跡であろうと推測した。

出土状況から火災をめぐる状況をまとめれば次のようになろう。

- ① SK01は16世紀前葉の遺構 SK08とはほぼ同じ規模、形態を呈し、かつ地割方向に沿って並び、前段階の場所の利用方法を踏襲している。
- ② SK01から出土した遺物には15世紀後半から16世紀中葉という時期幅がある。
- ③ 焼土塊の植物の茎や板状の痕跡はスサやコマイの痕とみられ、被災した建物には壁を持つものがあった。
- ④ 瓦の出土量は平瓦の小破片が少量出土したのみで、非常に少ない。
- ⑤ 出土した陶磁器には白磁杯や青磁皿、瓦質土器體などやや特殊な遺物が含まれている。
- ⑥ 棚 SA01は柱が抜かれており、火災の後こうした施設は撤去されている。
- ⑦ 火災の後今回調査の範囲で建物等は建てられず、耕地化したらしい。

①②からそれまで居住していた建物が被災し、火災の後片付けもそれまでの廃棄の方法と同じ方法が取られたことがわかる。また、その被災した建物は③④⑤からやや特殊な品があり、塗體を持つ建物であるが、瓦が乗っていた可能性は極めて低い。そして⑥⑦から火災を境に居住城から耕作域へと土地利用が意図的に大きく変化していることがうかがわれる。

また、先に検討したようにこの火災の範囲は今回の調査区付近という極めて小さな範囲に留まる。

そこでまず、第2期の第1段階～第2段階を勝部神社の動向など周辺の動きの中で捉えてみる。そしてこの火災痕跡の意味とそこにおける画期について考察したい。

まず15世紀から16世紀の勝部神社についてみてみる。社殿は現存する様札の最古のものは応永6年(1399)である。現存する社殿は明応6年(1497)に六角高額が勝部重秀と三上頼重を奉行として再建したものである。様札により弘治元年(1555)と天正3年(1575)に修復されたことがわかる。また、文禄3年(1594)には豊臣秀次により社殿の修復が行われている⁽¹²⁾。

また、勝部神社境内は勝部氏の居城、勝部城の跡とされている⁽¹³⁾。勝部神社北辺の川にそって土壌状の高まりが認められるが、発掘調査は行われておらず、詳細は不明である。勝部氏はこの地の土豪であり、六角氏の家臣であった。姓からも勝部神社の社家かそれに近い家柄と考えられる。

今回調査で確認されたⅡ期第1段階の時期には六角高額の社殿再建があり、第2段階の時期には弘治元年(1555)と天正3年(1575)の修復が行われている。第3段階の時期に文禄3年の豊臣秀次による修復が行われたのであろう。第1段階～第2段階に調査区は居住城として機能しており、立地的にも勝部神社にかかる人の居住城であったことが予想される。勝部氏は六角氏の被官であり、六角氏による再建と居住化は関連するものと考えられる。

文献史料では、この時期の遺跡周辺での火災に関する事件として元亀3年(1572)に織田信長と金森一揆と

の金森合戦、天正年間（1573～92）に安楽寺焼失がある。金森合戦において勝部神社には織田信長が本陣を置き軍を指揮した。勝部やその周辺の集落は信長につき、実際の戦闘は金森周辺に限られていたようである。『信長公記』や『金森退散記』には勝部やその周辺について焼失の記載はない⁽¹⁴⁾。安楽寺は現在黄檗宗であるが以前は天台宗で、寺伝によると開基は推古朝という。平安時代の木造千手観音像、中世の銅本涅槃図、大般若経が伝わっており、木造千手観音像は勝部神社祭神の本地仏とされる。火災の後寛文年間（1661～1673）に再建・改宗し、現在に至っている。

金森合戦の文献史料上に火災の記事がない以上、金森合戦と火災痕跡を結び付けることは難しい。しかし、安楽寺と関連付けるとしても瓦の出土量が非常に少ないと、仏具類が出土していないことから若干無理がある。

居住化と六角氏の支配が関係するすれば、居住城の終焉もまた六角氏との関わりで考えるべきであろう。六角氏は永禄11年（1568）に上洛を目指した織田信長によって滅ぼされる。この前後に勝部氏の没落を想定することは難しいことではない。文献史料には現れないが、その頃に調査区付近における火災と居住城の廃絶を考えておきたい。

第4節 16世紀末における勝部西浦遺跡周辺の土地改変について

今回の調査では16世紀末以降の開削された溝 SD03 を検出した。この溝は幅 50 cm 前後、深さ 10 cm 前後の浅く細い溝で、流水の痕跡がみられることから用水路の可能性が予想される。この溝の特徴は①溝の方位がほぼ正方位の東西方向で条里の方位ではない②敵高地の縁辺部に立地している③埋土中の二次堆積遺物は比較的多量かつ多様であるの 3 点にまとめられよう。

1 点目に関して溝 SD03 と同じ方位をもつものに勝部神社北端のラインとそこを流れる川がある。調査区と勝部神社の間、ちょうどどの川にそって低くなってしまっており、地図上でも水田など低湿地であることがわかる。等高線も溝と同じ方向に線が延びている。2 点目とも関連するが今回の調査区が乗っている敵高地は北西方向に細長く延びるものであり、守山小学校や今宿の集落と同じ敵高地上である。溝 SD03 はこの敵高地の縁辺部の開発に伴って、地形にあわせて掘削された溝であるといえる。

ただし、昭和55年の勝部遺跡の調査でも同様の形態の溝が確認されている。ここからは 7 世紀から 10 世紀の土器類が出土してその時期の遺構と考えられている。しかし、この溝も今回調査の溝 SD03 と同じ方位を持つ。新しい時期の遺物を全く含まないのでその点問題があるが、もしこれが一連の遺構とすれば、この方位の地割範囲はかなり広いものとみられ、かつ方位の問題は地形上の規制とともに、勝部神社の北辺ラインを基準とした地割と考えられる。そこには勝部集落が主体となって行われた開発を想定することができる。

それは 3 点目の特徴からもうかがえる。二次堆積の遺物は 8 世紀から 10 世紀のものであり調査区に展開した遺構のものではなく、他からもって来られたものである。昭和55年の勝部遺跡の調査でもこの時期の遺物は出土しているが、もし溝の所属時期を新しく考へるのであれば、二次堆積の可能性がある。その他に故地を考えれば、出土遺跡は現在のところみあたらぬ。しかし、勝部神社の物部布津神は平安前期の史料に登場することから、この神社が建っている敵高地上に奈良時代から平安時代の遺跡がある可能性がある。逆に今回の調査区や守山小学校の立地する敵高地上の女天神遺跡や本因寺旧境内遺跡の調査結果からみれば奈良時代から平安時代の遺跡の存在する可能性は極めて低い。とすれば、調査区周辺には勝部集落から土が持って来られた可能性があることが指摘できよう。

以上からすれば16世紀末に勝部集落が主体となって今回の調査区周辺で低地の開発が行われたらしいことがみてこよう。それは用水の開削と低地の埋め立てによる開発であったと予想される。

野洲川下流域においては複数の村が用水を共用している。この用水の主要なものに一ノ井、今井、二ノ井が

あり、それぞれに井組共同体を作っている。物部村は伊勢・古高・今宿などとともに今井組に属していた。この用水の開削時期はよくわからないが、おそらく16世紀末には開削されていたらしいと考えられている⁽¹⁵⁾。

この16世紀後半において鉄製農具、特にスキやクワについては大きな革新があり、土木技術が飛躍的にのびた時期でもある⁽¹⁶⁾。用水の開削や轍高地の地下げにはこうしたことが背景としてあると推測される。

第2段階の造構の柱は抜き取られ、開いた穴は人為的に埋められており、火災の後比較的早い時期に人為的に地ならしがされたことがわかる。開発が行われたのは時期的には織田氏の支配下に入つてすぐであった。織田氏はまさしくこの技術革新の担い手の1つであり、この影響により開発を行つたものと考えられる。また開発の主体としての物部村も金森合戦で織田信長の本陣となるなど、織田氏との関係に浅からぬものがあるのも1つの好条件であったのかもしれない。

前節でみたように天正年間に焼失した安楽寺は寛文年間に再建される。これが現在の安楽寺であり、この時期に地割はもとの条里地割に復したと考えられる。これは寺が再建されるに当つて周辺を整備するためもあるうが、溝 SD03は低地の耕地化にともない土が安定するまでの地割であったかもしれない。耕土が安定し完全に耕地化したところを見計らつて、安楽寺再建のおりに地割の整備も同時に行つたものと推察される。

註

- (1) 山崎秀二『女天神遺跡』(『乙真』第70号掲載、守山、平成8年)。山崎秀二氏、畠本政美氏ご教示。
- (2) 伴野幸一『本像寺遺跡の調査』(『平成10年度発掘調査報告集』所収、守山、平成11年)。畠本政美氏ご教示。
- (3) 山崎秀二・岩崎陽子『勝部遺跡発掘調査報告書』(『守山市文化財調査報告書』第8冊所収、守山、昭和61年)。山崎秀二氏、畠本政美氏ご教示。
- (4) 江谷 寛・柳山秀穂『経田遺跡発掘調査報告書』(京都、平成12年)。
- (5) 積山 洋はか『長原遺跡発掘調査報告』V(大阪、平成3年)
- (6) 小林青樹・野崎貴博『津島岡大遺跡10—第9次調査一』(『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第14冊、岡山、平成9年)
- (7) 黒田慶一『長原(城山)遺跡出土の「富官家」墨書き器』(『ヒストリア』第111号掲載、大阪、昭和61年)。
- (8) 野崎貴博『岡山平野における正方位方格地割水田の出現』(前掲註6所収)。
- (9) 岩本次郎『斑鳩地域における地割の再検討』(『文化財論叢』所収、京都、昭和58年)。
- (10) 部出比呂志『古墳時代の方格設計』(『条里制研究』第5号掲載、奈良、平成元年)。
- (11) 千田 総『ミヤケの地理的実体』(『史林』第58巻第4号掲載、京都、昭和50年)。
- (12) 『守山市史』(守山、昭和49年)。
- (13) 滋賀県教育委員会編『滋賀県中世城郭分布調査』3(大津、昭和60年)。
- (14) 前掲註(12)
- (15) 前掲註(12)
- (16) 河野通明『角先クワの成立—鎌倉期技術革新の一事例一』(『関西近世考古学研究』1掲載、大阪、平成3年)。

第6章 まとめ

今回発掘調査では飛鳥時代～奈良時代、室町時代後期～江戸時代前期と大きく2時期の遺構・遺物、弥生時代後期、古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代前期、平安時代後期の遺物を確認することができた。

- 1：飛鳥時代～奈良時代については条里方位と同じ方位を持つ溝 SD02 が確認された。その出土遺物より条里制施行前の7世紀前半まで遡る可能性がある。このような7世紀に遡る条里地割類似の遺構は近畿地方においては近年徐々にその事例は増加しつつある。また、歴史地理学からも「ミヤケ」との関連において注目されてきている。考古学ではあまり注目されていない遺構であるが、今後新たな発見が予想され、注意を促したい。
- 2：15世紀末～16世紀中葉にかけての堀や土坑が確認され、居住の痕跡が認められた。この居住化は15世紀後葉の勝部神社の再建と関連付けて考えれば、この地の国人勝部氏の台頭と関わりがあると考えられる。
- 3：この居住域は16世紀中葉に廃絶する。この時期の遺構からは多量の焼土塊が出土し、それは形態から壁土の一部とみられることから、この廃絶に関して火災があったものと考えることができる。出土遺構・遺物と文献史料での火災関連記事に少なからぬずれが認められ、この火災についての具体的な意味が今のところよくわからない。居住域の成立に国人勝部氏がかかわっていたことから、この廃絶も勝部氏の没落と関連付けることが想定ではないかと思われる。
- 4：16世紀末に地形に沿って正方位に近い方位の溝が掘削される。これは居住域から耕作域に転換した際、調査区西側にある低地の開発に伴う水路ではないかと推測できた。それは二次堆積遺物が豊富で、他の地域、おそらく現在勝部集落周辺の土を盛っていると推定されること、16世紀末に野洲川下流域では用水路が整備されることから推測できる。条里方位とは異なる方位を探っているのは、おそらく搬入した耕作土が安定するまでの排水を目的として、地形にあわせ、かつ勝部神社の北端ラインを基準としているためであろう。

今回の調査にあたっては東洋建設株式会社、並びに丸尾利一氏には大変お世話になりました。記して感謝申しあげます。また、今回の発掘調査及び整理作業に関しましては、次の関係各位にはご教示とご協力を賜りました。記して謝意を表します（五十音順、敬称略）。

中井 均・畠中政美・原口正三・宮崎幹也・山崎秀二・守山市教育委員会・守山市立埋蔵文化財センター

第1表 土抗一覧表

カッコは残存値

番号	地区	土層	形態	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
01	C5, C6	1: 2.5Y5/1黄灰色砂泥(マンガン粒, 焙土, 炭化粒, 土器片, 10YR6/6明黄色砂泥ブロック含む) 2: 10YR3/3暗褐色砂泥(燒土, 炭化粒, 土器片, 10YR6/6明黄色砂泥ブロック含む) 3: 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(マンガン粒, 焙土, 淬化粒, 土器片含む) 3~5cmの礫少數含む) 4: 10YR4/2灰黄色砂泥(燒土, 炭化粒, 土器片含む)	方形	182	159	45	土師器(古墳時代)(縦), 土師器(奈良・平安時代)(杯B・縦), 土師器(中世)(直・羽釜), 須恵器(杯口蓋・环杯蓋・縦), 黑色土器(直), 黒色土器(縦), 黒色土器(直・縦), 同安窯系青磁(直), 須戸安窯系青磁(直), 瓦質土器(丸底), 元世瓦(平瓦・丸瓦), 砕石, 鉄釘, 焙土, 木炭	2基の土坑が切り合っている
02	A4, A5 B4, B5	2.5Y5/1黄灰色砂泥(燒土, 炭化粒, 土器片少數含む)	方形	192	99	13	須恵器(縦), 俗楽(縦), 近世瓦(平瓦), 焙土	
03	C3	5Y5/1灰黄色砂泥(燒土, 炭化粒, 10YR6/6明黄色砂泥ブロック, 5Y6/3オーピー灰黄色砂泥ブロック含む)	梢円形	108	93	81	土師器(古墳時代)(縦), 土師器(中世)(直・縦), 須恵器(杯口蓋・杯口・縦), 近世瓦(平瓦), 鉄釘, 焙土	
04	A3	2.5Y5/1黄灰色砂泥	方形	118	113	6	土師器(古墳時代)(縦・直・高), 土師器(奈良・平安時代)(杯), 須恵器(杯口蓋・杯口・縦・直), 砕石	
05	A3	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭化粒, 土器片少數含む)	方形	91	62	21	土師器(器底不明破片), 須恵器(縦), 俗楽(縦)	
06	A3	2.5Y4/2暗灰黄色砂泥(炭化粒, 土器片少數含む)	不整形	74	63	11	(なし)	
07	B3	2.5Y5/2暗灰黄色砂泥(炭化粒, 土器片少數含む)	方形	(183)	(59)	21	須恵器(縦)	擾乱に切られている
08	B5, B6	1: 5Y6/2灰オーピー灰黄色砂泥(マンガン粒, 炭化粒等含む) 2: 10YR5/6暗灰黄色砂泥ブロックを多量に含む) 3: 10YR5/1暗灰黄色砂泥(燒土, 炭化粒, 土器片), 2.5Y5/4(黄褐色砂泥ブロック含む) 3: 5Y5/1灰黄色砂泥 4: 2.5Y5/1灰黄色砂泥(炭化粒, 2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥ブロックを含む) 5: 10YR5/1暗灰黄色砂泥	方形	142	134	43	土師器(中世)(直), 素直器(杯口蓋・縦), 黑色土器(縦), 俗楽(縦・横), 砕石, 鉄釘, 焙土, 木炭	

第2表 ピット一覧表

カッコは残存値

番号	地区	土色	土質	特徴	形態	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
1	B6	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		方形	35	27	19		
2	B6	2.5Y5/1灰黄色	砂泥		円形	31	29	10		
3	B6	5Y5/1灰黄色	砂泥		円形	18	18	17	須恵器(縦), 俗楽(縦), 焙土	
4	B6	2.5Y5/3黄褐色	砂泥	焼土, 炭化粒, 土器片含む	円形	46	38	9	焙土	
5	B6	5Y5/1灰黄色	砂泥	マンガン粒含む, 焙土, 土器片含む	円形	40	40	6	土師器(器底不明破片), 須恵器(杯口蓋・縦), 俗楽(縦・横), 焙土	
6	B6	2.5Y6/1黄灰色	砂泥	焼土, 土器片, 10YR7/6明黄色砂泥ブロック含む	円形	34	31	19	俗楽(縦), 焙土	
7	B6	10YR4/3にぶい黄褐色	砂泥		円形	37	35	28		
8	C6	10YR5/2灰黄褐色	砂泥	炭化粒, 土器片, 2.5Y7/4後黄褐色砂泥ブロック含む	円形	21	20	10		
9	B6, C6	10YR5/2暗灰黄色	砂泥		円形	48	41	10		
10	C6	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	マンガン粒含む	円形	31	30	10	俗楽(縦)	
11	C6	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	マンガン粒含む	方形	54	45	3		
12	C6, D6	5Y5/2灰オーピー色	砂泥	マンガン粒含む	方形	52	42	2		
13	C5	5Y5/2灰オーピー色	砂泥		円形	28	24	35	土師器(中世)(直), 須恵器(器底不明破片), 俗楽(縦), 近世瓦(平瓦), 焙土	
14	B6	2.5Y4/2暗灰黄色	砂泥	炭化粒, 土器片含む	方形	26	23	18	土師器(器底不明破片)	
15	B5	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	10YR6/6明黄色砂泥ブロック含む	円形	48	45	7		
16	B5(既掘)				円形	22	22	8		
17	A4	2.5Y4/2暗灰黄色	砂泥		方形	30	23			
18	A4	5Y5/2灰オーピー色	砂泥		方形	16	16	5		
19	B4	2.5Y5/1灰黄色	砂泥		不整形	70	48	4		
20	A4	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		梢円形	24	18			
21	B4	5Y5/3灰オーピー色	砂泥	マンガン粒含む	円形	32	29	13		
22	B4	2.5Y5/3黄褐色	砂泥	マンガン粒含む	円形	36	34	4		

番号	地区	土色	土質	特徴	形態	長さ(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備考
23	B4	7.5YR4/2灰褐色	砂泥		方形	25	22	11		
24	B4	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		方形	14	10	9		
25	(欠番)		砂泥							
26	B5	5Y5/2灰オーブ色	砂泥		円形	24	22	15		
27	B5	5Y5/1灰色	砂泥	マンガン鉱、炭化鉄、土器片、2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥ブロック含む	方形	48	36	23	鏡土	
28	B5	5Y5/2灰オーブ色	砂泥		円形	27	18	12		
29	B5	5Y5/1灰褐色	砂泥		方形	17	15	10	信楽(鏡)	
30	B4	5Y5/1灰色	砂泥		方形	29	20	11		
31	B4, C4	2.5Y5/3黄褐色	砂泥	土器片、2.5Y7/4にぶい黄色砂泥ブロック含む	方形	43	39	23		柱当: 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
32	B4, C4	10YR5/3にぶい黄褐色	砂泥	マンガン鉱含む	円形	24	24	11	弥生土器? (鏡?)	
33	B4	2.5Y5/3黄褐色	砂泥		円形	24	22	7		
34	B4, C4	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	焦土、炭化鉄、土器片、2.5Y7/2灰黄色砂泥ブロック含む	長方形	60	38	39	黒色土器(鏡)、鏡土	
35	B4	5Y5/2灰オーブ色	砂泥		方形	23	20	10	土器器(器皿不明破片)	
36	C4	5Y5/2灰オーブ色	砂泥		円形	13	12	9	土器器(器皿不明破片)	
37	C4	5Y6/2灰オーブ色	砂泥	10YR6/6明黄褐色砂泥ブロック含む	円形	14	14	5		
38	C4	10YR5/3にぶい黄褐色	砂泥		方形	20	19	20		
39	C4	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	1~2cmの礫、鏡土、炭化鉄、土器片含む	方形	55	42	45	土器器(器皿不明破片)、鏡土	
40	C4	2.5Y4/3オーブ色	砂泥		円形	32	29	43		
41	C4	2.5Y4/2暗灰黄色	砂泥	土器片含む	方形	46	37	23	土器器(古墳時代)(鏡)	
42	C4	2.5Y4/1黄灰色	砂泥	鏡土、炭化鉄含む	方形	41	38	36	土器器(器皿不明破片)	
43	C4	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		円形	29	24	10		
44	C4, D4	2.5Y4/2暗灰黄色	砂泥	鏡土、炭化鉄、2.5Y7/2灰黄色砂泥ブロック含む	円形	42	42	31	信楽(鏡)、鉄釘、鏡土	
45	C3	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		円形	53	48	20	土器器(中世)(鏡)、鏡鑑、木楔	
46	B1, B2	10YR5/2灰黄褐色	砂泥		方形	31	26	32	須恵器(杯口)	
47	B1	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		円形	20	16	19		
48	B1	10YR4/1褐灰色	砂泥		円形	12	12	16		
49	B1	2.5Y6/2灰黄褐色	砂泥		方形	22	20	29		
50	B5	7.5YR3/2黑褐色	砂泥		方形	24	24	5		
51	A4	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		方形	26	20			
52	A4	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		方形	21	18			
53	A4	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥		円形	9	9	6		
54	B4	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		円形	17	17	4		
55	B4	2.5Y5/3黄褐色	砂泥	2.5Y7/4浅黄色砂泥ブロック含む	方形	48	46	23		柱当: 5Y5/2灰オーブ色砂泥
56	A4	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		方形	15	14	10		
57	B5	(既報)			円形	25	20	23		
58	B4	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥	鏡土、炭化鉄、土器片、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥ブロック含む	円形	40	37	40	鏡土	
59	C5	2.5Y3/2黑褐色	砂泥	2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥ブロック含む	方形	88	34	45	土器器(器皿不明破片)、須恵器(鏡)	
60	C4	5Y4/2灰オーブ色	砂泥		方形	42	38	25	土器器(器皿不明破片)、須恵器(杯口)、鉄釘、鏡土	柱当: 2.5Y4/3オーブ色砂泥
61	C5	5Y5/3灰オーブ色	砂泥	鏡土、炭化鉄、2.5Y4/4オーブ色砂泥ブロック含む	方形	42 (32)	87		鏡土	
62	C3	2.5Y6/1黄灰色	砂泥		椭円形	20	15	18		
63	C6	5Y6/1灰色	砂泥	マンガン鉱、2.5Y6/4にぶい黄褐色砂泥ブロック含む	方形	54	41	9	須恵器(鏡)、鏡土	
64	C3	(既報)			円形	20	15	22		
65	B6	5Y5/2灰オーブ色	砂泥	鏡土、炭化鉄、2~3cmの礫、2.5Y6/3にぶい黄褐色砂泥ブロック含む	円形	41	37	19		

番号	地区	土色	土質	特徴	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	出土遺物	備考
66	B5	(底掘)	砂泥		円形	22	20	9		
67	B5	2.5Y4/1黄灰色	砂泥		方形	31	25	10		
68	B4	5Y4/1灰色	砂泥		方形	13	12	11		
69	B4	2.5Y5/2暗灰黄色	砂泥 マンガン粒含む		円形	40	29	13		
70	B3	2.5Y5/1黄灰色	砂泥		方形	10	7	10		
71	B1	2.5Y4/3オーリーブ褐色	砂泥		円形	10	9	24		
72	B5	(底掘)			円形	13	12	3		
73	B5	2.5Y5/1黄灰色	砂泥 焙土粒、炭化粒、土器片、20~30 cm の雜含む		楕円形	121	52	50		

第3表 石器・石製品調査表

カッコは残存値

番号	遺物番号	種類	出土遺構	我存部位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	備考
58	01KN-SD02-G1	石皿	SD02下層	破片	(11.7)	(15.0)	8.5	(1801)	花崗岩	
59	01KN-SK04-G1	砥石	SK04	破片	(4.1)	(3.0)	(1.1)	(14)	粘板岩?	仕上げ砥
60	01KN-SK08-G1	砥石	SK08	破片	(6.6)	(2.8)	(2.6)	(40)	粘板岩?	中砥?

第4表 鉄器・鉄製品調査表

カッコは残存値

番号	遺物番号	種類	出土遺構	残存状態	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
61	01KN-P45-H1	鉄鎌	P45	基部	(7.4)	(4.4)	0.5	(19)	
64	01KN-SK01-H1	鉄釘	SK01	先端欠	(5.4)	1.5	1.0	(10)	
63	01KN-SK08-H1	鉄釘	SK08	先端欠	(4.1)	1.3	1.0	(6)	頭部平たく叩き伸ばされている
62	01KN-P44-H1	鉄釘	P44	先端欠	(5.3)	1.7	1.1	(12)	
65	01KN-P60-H1	鉄釘	P60	頭部・先端欠	(3.1)	(0.8)	0.5	(3)	

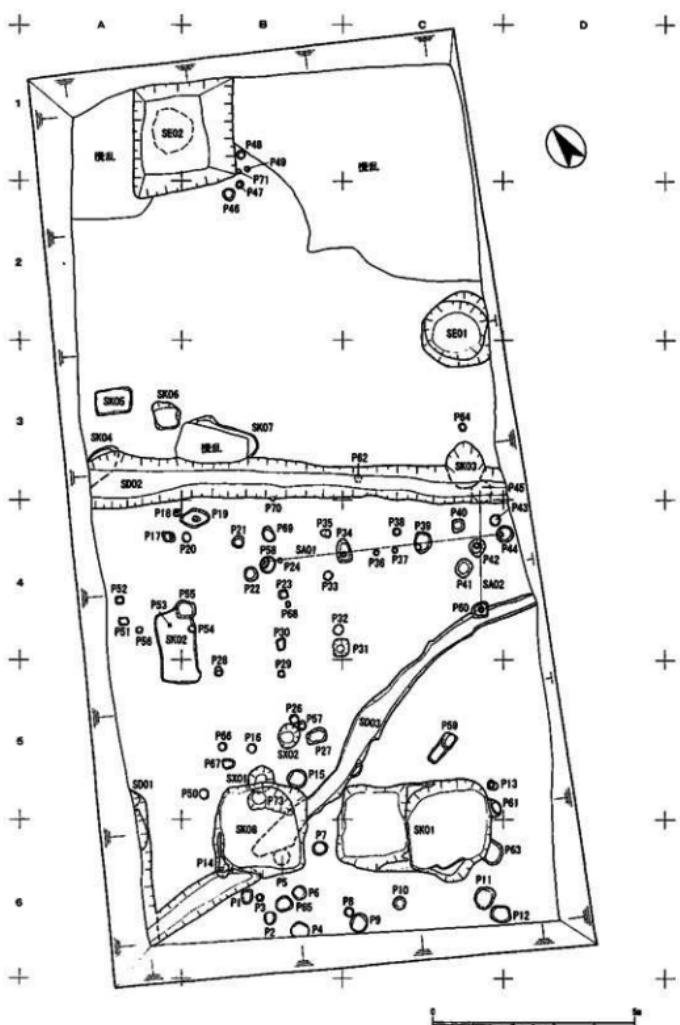
カッコ内は残存値

番号	遺物番号	種類	器種	出土遺構	残存率	直徑 (cm)	高さ (cm)	調査(内面/外面)	胎土	色調(内面/外面/断面)	焼成	備考
1	01KN-SD03-A3	弥生土器	甕	SD03	1/8	(18.6)	(2.5)	ヨコナデ/ヨコナデ	1mmの長石、石英、チャート、赤色斑紋を含む	7.5YR8/2灰白色/7.5YR8/2灰白色/7.5 YR8/1灰白色	良好	
2	01KN-SK01-A4	土師器	甕	SK01	1/12	(14.0)	(2.1)	摩滅/摩滅	1mm以下の長石、石英を含む	10YR8/2灰白色/7.5YR8/3浅黄褐色/N2/0 1/黒色	良好	
3	01KN-全体-A1	土師器	甕	Ⅲ層上面	1/10	(17.6)	(3.3)	口縁ヨコナデ・摩滅/口縁ヨコナデ・摩滅	1~3mmの長石、石英、チャートを含む	10YR8/3浅黄褐色/10YR8/2灰白色/2.5Y2 1/黒色	良好	
4	01KN-全体-A1	土師器	甕	Ⅲ層上面	1/6	(19.6)	(3.6)	摩滅/ヨコナデ	1~3mmの長石、石英、チャート、赤色斑紋を含む	7.5YR8/2灰白色/7.5YR7/3にぶい・緑色/N 3/1暗灰色	良好	
5	01KN-SK04-A4 -5-6	土師器	甕	SK04	1/4	(17.7)	(15.2)	摩滅/摩滅	1~2mmの長石、石英、チャート、赤色斑紋(微少)を含む	10YR8/3浅黄褐色/7.5YR8/4浅黄褐色/2. 5Y8/2灰白色	良好	
6	01KN-SK04-B3	土師器	甕	SK04	1/8	(11.8)	(2.8)	ヨコナデ/ヨコナデ	1mmの長石、石英を含む	5Y7/1灰白色/2.5Y8/1灰白色/2.5Y8/1灰 白色	良好	
7	01KN-SK04-A13	土師器	高杯脚部	SK04			(9.6)	未調査(棒状工具の痕跡残る) / 摩滅	1~2mmの長石、石英、チャート、赤色斑紋を含む(微細な骨母を含む)	7.5YR7/3にぶい・緑色/7.5YR8/4浅黄褐色 2.5Y8/3灰白色	良好	
8	01KN-SD03-A2	土師器	皿	SD03	1/6	(4.6)	1.1	ヨコナデ/ヨコナデ	砂粒を含まない(微細な石英、骨母を含む)	10YR7/1灰白色/7.5YR7/2明褐灰色/10 YR7/1灰白色	良好	
9	01KN-SE01-A1	土師器	皿	SE01	1/3	(7.3)	1.6	口縁ヨコナデ・底部ヒビオサエ/ 口縁ヨコナデ・底部ヒビオサエ	砂粒を含まない(微細な骨母を含む)	5YR6/4にぶい・橙色/5YR7/4にぶい・橙色/5 YR6/6緑色	良好	
10	01KN-P45-A1	土師器	皿	P45	1/8	(9.4)	1.5	ヨコナデ/ヨコナデ	砂粒を含まない(微細な骨母を含む)	7.5YR7/3にぶい・橙色/7.5YR7/4にぶい・橙 色/7.5YR8/2灰褐色	良好	
11	01KN-SK09-A1	土師器	皿	SK08	1/8	(11.0)	(1.4)	ヨコナデ/ヨコナデ	1mmの石英を含む(微細な骨母を含む)	7.5YR6/3にぶい・橙色/7.5YR6/2灰褐色/ 7.5YR7/3にぶい・橙色	良好	
12	01KN-SD01-A1	土師器	皿	SD01	1/6	(10.6)	(1.4)	摩滅/摩滅	砂粒を含まない(微細な骨母を含む)	7.5YR6/4にぶい・橙色/5YR7/4にぶい・橙色/ 7.5YR8/2灰白色	良好	
13	01KN-SK01-A2	土師器	皿	SK01	1/8	(10.6)	(1.5)	ヨコナデ/ヨコナデ	1mm以下の長石、石英、チャートを含む	7.5YR7/2明褐灰色/10YR7/2にぶい・黄褐色 1/0YR8/2灰白色	良好	
14	01KN-SK01-A4	土師器	皿	SK01	1/3	(13.0)	(1.3)	ヨコナデ/ヨコナデ	砂粒を含まない(微細な長石、石英、骨母を含む)	7.5YR8/4浅黄褐色/7.5YR8/3浅黄褐色/ 7.5YR7/4にぶい・橙色	良好	
15	01KN-P13-A1	土師器	皿	P13	1/4	(14.0)	(1.6)	ヨコナデ/ヨコナデ	砂粒を含まない(微細な骨母を含む)	7.5YR7/1明褐灰色/10YR6/1褐灰色/2.5 YR7/4灰褐色	良好	
16	01KN-SK03-A3	土師器	鉢?	SK03			(4.3)	斜位またはヨコナデ/斜位またはヨコナデ	1~3mmの長石、石英を含む(微細な骨母を含む)	2.5Y8/2灰白色/10YR7/2にぶい・黄褐色/10 YR8/2灰白色	良好	
17	01KN-SK01-A6	土師器	甕	SK01	1/4	(22.0)	(11.7)	口縁ヨコナデ・斜位又は斜位ナダ/ 口縁ヨコナデ・斜位ヘラケメリ	1mmの長石、石英を含む(微細な骨母を含む)	7.5YR8/2灰褐色/N2/0黒色、または5YR 6/3にぶい・橙色/5Y7/3にぶい・橙色	良好	
18	01KN-SK03-B3	須恵器	怀日天井 井戸	SK03			(1.6)	ヨコナデ/ヨコナデ	1mm以下の石英、長石を含む	5PB6/1青灰色/SB3/1青黒色/SB3/1青灰色 1/青灰色	良好	
19	01KN-SK03-B1	須恵器	怀日天井 井戸	SK03			(2.7)	ヨコナデ/回転ヘラケメリ・ヨコナデ	1~2mmの石英、長石、1mmの卵石を含む	5BS/1青灰色/SB5/1青灰褐色/5R6/1赤褐色 1/青灰色	良好	
20	01KN-SK08-B1	須恵器	怀日天井 井戸	SK08			(3.2)	ヨコナデの後天井部分方向不定のナダ/ 天井部回転ヘラカトリの後方向不定のナダ・ヨコナデ	1mm以下の石英、長石を含む	5BS/1青灰色/SB6/1青灰色/SB5/1青灰色 1/青灰色	良好	
21	01KN-SD03-B2	須恵器	怀日蓋	SD03	1/6	(10.4)	(3.0)	ヨコナデ/ヨコナデ	1~3mmの石英、長石を含む	5PB7/1明青灰色/N7/0灰白色/5PB7/1明 青灰色	良好	
22	01KN-SK04-B8	須恵器	怀日蓋	Sk04	1/2	(7.7)	3.5	ヨコナデ/ヨコナデ・天井部 回転ヘラケメリ	1mm以下の石英、長石、輝石を含む	5B6/1青灰色/SB6/1青灰色/SB6/1青灰色 1/青灰色	良好	

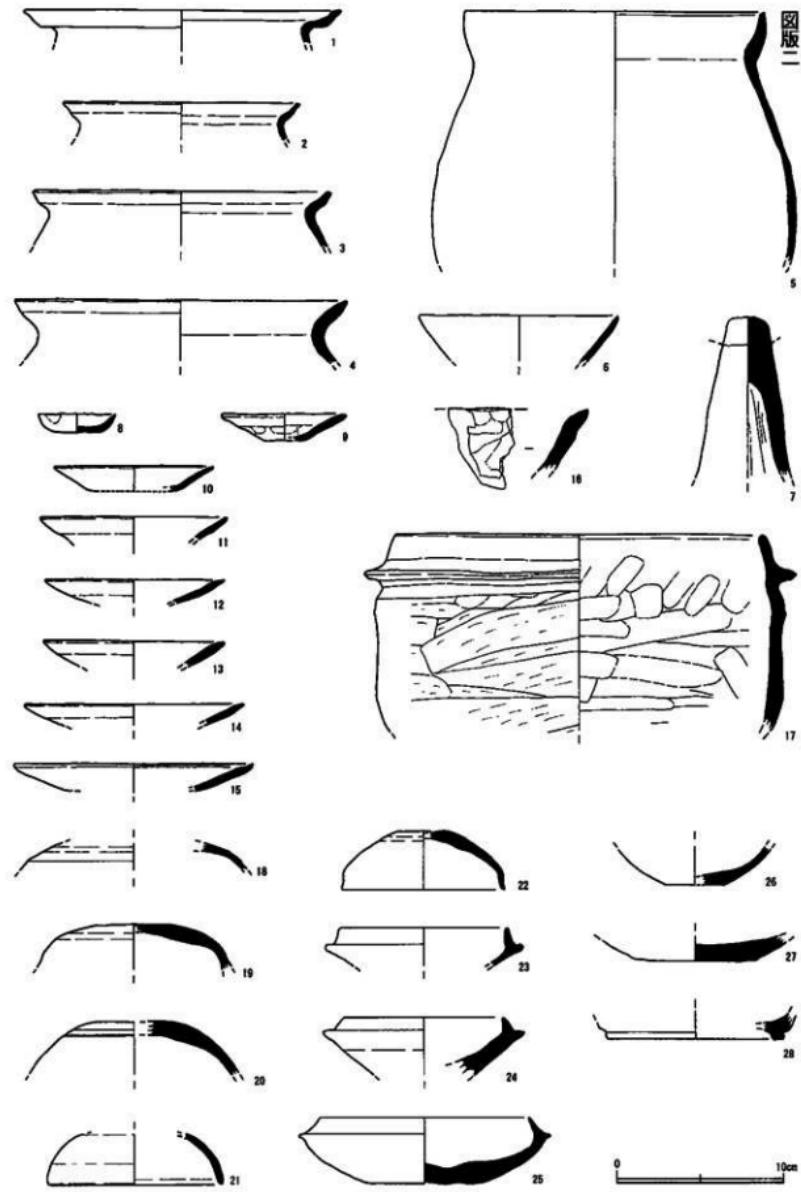
番号	遺物番号	種類	器種	出土遺跡	洗存率	直徑 mm	高さ mm	調査(内面/外面)	胎土	色調(内面/外面/断面)	機成	備考
23	01KN-SK04-B7	須恵器	杯H	Sk04	1/6	(10.0)	(2.3)	ロクロナデ/ロクロナデ	1 mm 以下の石英、長石、輝石を含む	5PB6/1青灰色/5PB5/1青灰色/5PB6/1青灰色	良好	
24	01KN-SD02-B6	須恵器	杯H	SD02	1/6	(19.5)	(3.5)	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒を含まない	10R6/2灰赤色/2.5YR6/2灰赤色/5RP6/1	良好	
25	01KN-SD02-B7	須恵器	杯H	SD02 下 部	1/4	(12.4)	6.0	ロクロナデ/ロクロナデ	1~3 mm の石英、長石を含む	5B5/1青灰色/5B4/1暗青灰色/5B5/1青灰色	良好	
26	01KN-SK04-B4	須恵器	杯H底部	Sk04	1/3	(2.5)	(2.3)	ロクロナデ/ロクロナデ・底部未 調整	1 mm 以下の石英、長石を含む	N6/0灰色/5Y7/1灰白色/10Y8/1灰白色	良好	
27	01KN-SK03-B2	須恵器	杯H底部	SK03	1/4	(7.2)	(1.5)	ロクロナデ/ロクロナデ・底部未 調整	砂粒を含まない	5B6/1青灰色/5B5/1青灰色/5B6/1青灰色	良好	
28	01KN-SD02-B6	須恵器	杯B底部	SD02	1/6	(10.6)	(1.6)	半球/ミコナデ	砂粒を含まない	2.5Y8/1灰白色/2.5Y7/1灰白色/2.5Y8/2	良好	
29	01KN-P60-B1	須恵器	盤	P60	1/6	(20.0)	(5.6)	ロクロナデ/ロクロナデ	1~2 mm の石英、長石を含む	5PB6/1青灰色/5PB5/1青灰色/N7/0灰白色	良好	沈鏡2条
30	01KN-SK01-B2	須恵器	高杯底 部	SK01			(2.6)	ロクロナデ/回転ヘラケズリ	1 mm の石英、長石を含む	5B6/1青灰色/5PB6/1青灰色/10YR7/2に 入り黄褐色	良好	
31	01KN-SD02-B6	須恵器	高杯脚部	SD02			(3.6)	ナデ・横位ヘラケズリ/ロクロナ デ	砂粒を含まない	5B5/1青灰色/5B4/1暗青灰色/5R5/1赤灰 色	良好	沈鏡1条
32	01KN-SD02-B6	須恵器	盤板?蓋 部?	SD02			(5.2)	ロクロナデ/ロクロナデ	砂粒を含まない	5PB6/1青灰色/5PB3/1暗青灰色/10R6/2 灰赤色	良好	沈鏡3条
33	01KN-SD03-B3	須恵器	台付長板 底底部	SD03	1/6	(7.5)	(2.9)	ロクロナデ/ロクロナデ	1 mm 以下の石英、長石、輝石を含む	N6/0灰色/N6/0灰色/N6/0灰色	良好	
34	01KN-SK07-B1	須恵器	腰鉗部	SK07			(5.5)	ヨコナデ・同心円印きナデ消し/平行 印き一部回転タシナデ	1 mm 以下の石英、長石を含む	5B6/1青灰色/N7/0灰白色/10Y7/1灰白色	やや不良	
35	01KN-SK01-R3	須恵器	腰鉗部	SK01			(4.8)	ナデ/格子目印き	1 mm の石英、長石を含む	5PB4/1青灰色/N6/0灰色/5PB4/1暗青灰 色	良好	
36	01KN-P63-B1	須恵器	腰鉗部	P63			(4.3)	横位または斜位ナデ/格子目印き	1~2 mm の石英、長石、輝石を含む	N5/0灰色/N6/0灰色/N6/0灰色	良好	
37	01KN-SK08-B3	須恵器	施頭~腰 部	SK08			(12.6)	同心円印き・一部ナデ消し/平行 印き一部回転タシナデ	1 mm 以下の石英、長石を含む	N5/0灰色/5PB5/1青灰色/N5/0灰色	良好	
38	01KN-SK01-B3	須恵器	腰鉗部	SK01			(3.6)	同心円印きナデ消し/平行印き一 部回転タシナデ	1~2 mm の石英、長石を含む	2.5Y8/1灰白色/5B6/0灰色/5PB4/1暗青灰 色	良好	
39	01KN-全体-B2	須恵器	腰鉗部 Ⅲ筋上面				(5.7)	平行印き/?/平行印き	1 mm 以下の石英、長石を含む	5PB5/1青灰色/N4/0灰色/2.5Y7/1灰白色	良好	
40	01KN-SD03-B1	須恵器	腰鉗部	SD03			(5.2)	同心円印き/平行印き・一部回転 タシナデ	1 mm 以下の石英、長石、輝石を含む	5B6/1青灰色/5B5/1青灰色/5B7/1明青灰 色	良好	
41	01KN-P60-B1	須恵器	腰鉗部	P60			(7.4)	同心円印き/平行印き	1 mm 以下の石英、長石を含む	5B5/1青灰色/5B4/1暗青灰色/5PB6/1青灰 色	良好	
42	01KN-SK08-B2	須恵器	腰鉗部	SK08			(7.0)	同心円印き/平行印き	1~3 mm の石英、長石を含む	5PB5/1青灰色/5PB4/1暗青灰色/5PB6/1 青灰色	良好	
43	01KN-SD01-B1	須恵器	腰鉗部	SD01			(6.0)	同心円印き/平行印き・一部回転 タシナデ	砂粒を含まない	N6/0灰色/N5/0灰色/5B5/1青灰色、一部 SR6/0赤灰色	良好	
44	01KN-SK07-B1	須恵器	腰鉗部	SK07			(4.8)	同心円印き/圓錐文印き、一部回 転タシナデ	1 mm 以下の石英、長石、輝石を含む	N6/0灰色/N7/0灰白色/10Y7/1灰白色	やや不良	
45	01KN-SK01-B2	須恵器	腰鉗部	SK01			(4.3)	同心円印き/平行印き	1~2 mm の石英を含む	5PB6/1青灰色/5B5/1青灰色/N7/0灰白色	良好	
46	01KN-SX02-C2	信楽	盤	SX02	1/4	(50.0)	(31.1)	ヨコナデ/?コナデ	1~7 mm の石英、長石を含む	5YR7/3に入り、橙色/2.5YR6/4橙色/10YR 8/2灰白色	良好	

番号	遺物番号	種類	部位	出土遺物	残存率	直径 (cm)	高さ (cm)	調査(内面/外面)	胎土	色調(内面/外面/断面)	焼成	備考
47	01KN-SX01-C2	信楽	底底部	SX01	底部空形	23.6	(14.0)	ヨコナデ/底部下位横板ナデ・底盤付近ヨコナデ・底部未調整 (削り跡含む)	1~7 mm の石英、長石を含む	10R4/1暗赤褐色/10R3/4赤褐色/N3/0暗灰色	良好	
48	01KN-SX02-C2	信楽	更衣部	SX02	底部空形	19.6	(21.7)	底部下位斜位板ナデの後ヨコナデ・底盤ヨコナデ/底部板ナデ・底盤未調整 (削り跡含む)	1~3 mm の石英、長石を含む	10R3/2暗赤褐色/10R4/4赤褐色/5PB4/1 暗青灰色	良好	歪みあり
49	01KN-SB02-D2	瓦質土器	洗鉢	SE02	1/8	(22.6)	(4.6)	横位ハケメ/横位ヘラケズリ	1 mm の長石、石英、赤色斑状を含む(鐵錆状変化を含む)	7.5YR7/2明褐色/10YR1.7/1黒色/5YR7/2明褐色	やや不良	
50	01KN-SK01-C6	信楽	縦縫	SK01	1/4	(34.8)	14.7	ヨコナデ/ヨコナデ	1~7 mm の石英、長石を含む	10R4/3赤褐色/10R5/1赤灰色/5PB4/1暗青灰色	良好	描目 5 条/単位
51	01KN-SK01-C1	信楽	裏	SK01			(5.4)	ヨコナデ/ヨコナデ	1~5 mm の石英、長石を含む	10R5/4赤褐色/5YR6/4に近い褐色/N8/0 灰色	良好	
52	01KN-SK01-C6	信楽	縦縫側部	SK01			(5.7)	ヨコナデ/ヨコナデ	1~7 mm の石英、長石を含む	10R6/6赤褐色/2.5YR7/6褐色/2.5YR8/4 に近い褐色	良好	描目 1 条/単位
53	01KN-SK01-D1	瓦質土器	側脚部	SK01			(4.1)	摩滅、一部ヘラミガキ残存/摩滅、一部ヘラミガキ残存	微細な鉄錆を含む	N2/0墨色/N3/0暗灰色/5PB4/1暗青灰色	良好	
54	01KN-SK01-A3	黒色土器	純	SK01	1/8	(16.6)	(1.6)	摩滅、側位または斜位のヘラミガキ+一層残存/摩滅	砂粒を含まない(微細な鉄錆を含む)	2.5Y4/1黒褐色/2.5Y8/2灰白色/2.5Y8/1 灰白色	良好	
55	01KN-SX01-C1	古瀬戸	底底部	SX01	1/6	(9.0)	(3.6)	ヨコナデの後施釉/ヨコナデの後施釉	砂粒を含まない	N7/0灰白色/5Y8/1灰白色/5Y7/1灰白色	良好	オリーブ灰色の 鉄(灰鉄)が掛かる
56	01KN-SX01-C1	白磁	腰折杯	SX01	1/3	(7.4)	(2.5)	ヨコナデ/回転ヘラケズリ、八 角形にするためヘラケズリ	砂粒を含まない	白色/白色/白色	良好	青味がかった白 色に光沢感、無開窓 あり、貯入なし
57	01KN-SK01-C3	同穴清承 青磁	底底部	SK01	1/4	(5.0)	(0.7)	ヨコナデ/回転ヘラケズリ	砂粒を含まない	青緑色/青緑色/白色	良好	青味がかった藍 色の青磁の特徴をも つて、無開窓あり、貯入 なし
66	01KN-SK01-C4	綠釉陶器	施釉部	SK01			(1.4)	ヨコナデの後施釉/回転ヘラケ ズリの後施釉	砂粒を含まない	SPB7/1明青灰色/SPB7/1明青灰色/SPB6/ 1青灰色	良好	綠釉が掛かる
67	01KN-SK01-C1	灰釉陶器	施釉部	SD03			(1.4)	ヨコナデの後施釉/回転ヘラケ ズリ	砂粒を含まない	N8/0灰白色/N7/0灰白色/7.5Y7/1灰白色	良好	灰釉が掛かる

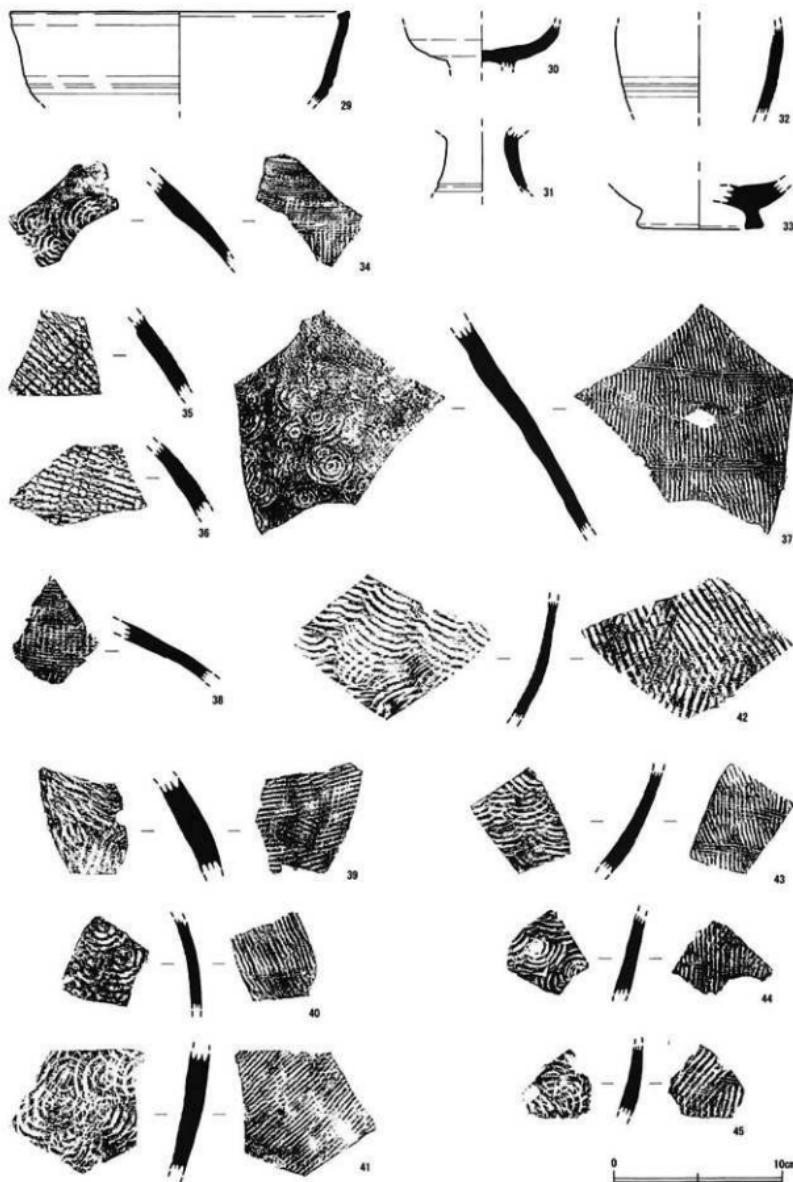
図 版



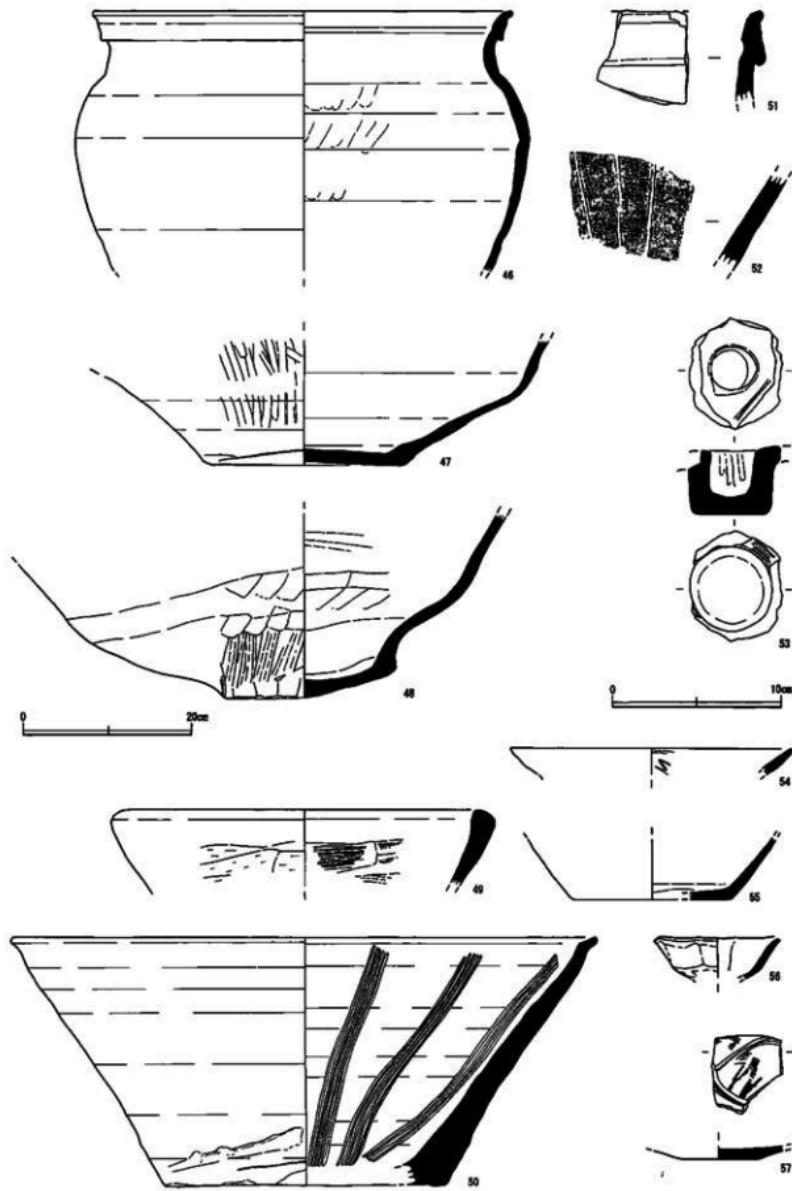
調査区全体図 (1/125)



弥生土器・土師器・須恵器実測図 (1/3)



須恵器実測図 (1/3)



黑色土器・瓦質土器・陶器・磁器実測図 (1/3)



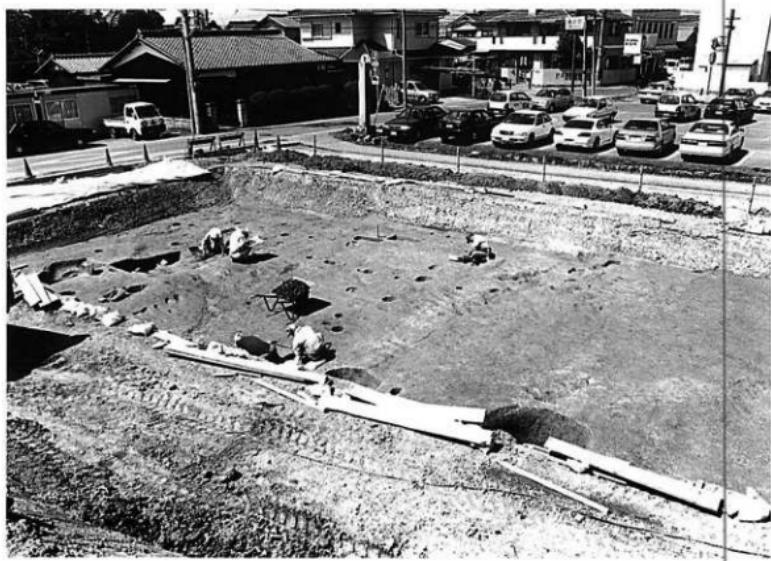
遺跡遠景（東・コスモ守山五番館屋上より）



発掘前光景（西より）



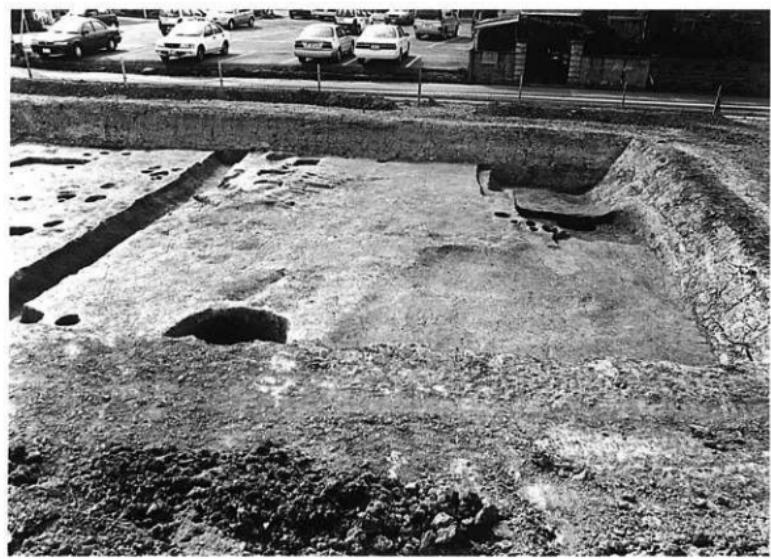
重機掘削の光景



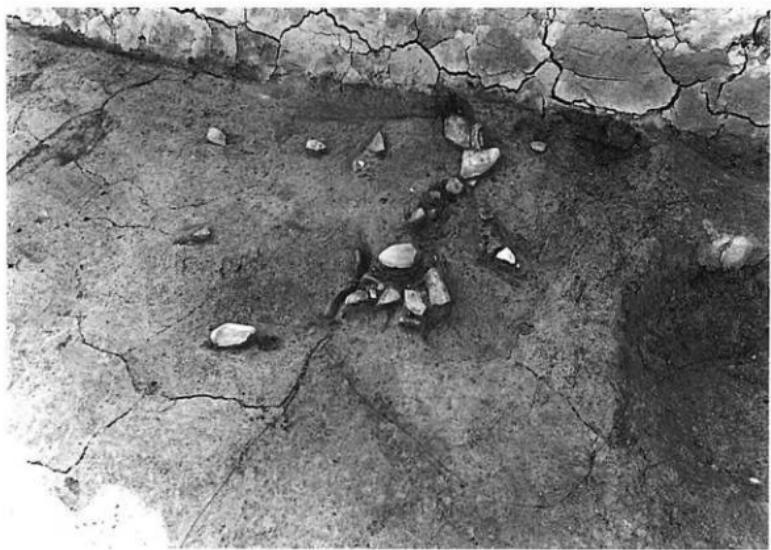
造構掘り下げる作業光景



終了光景（北東より）



終了光景（南東より）



土坑 SK04 遺物出土状況（南より）



土坑 SA01・溝 SD02 完掘状況（南東より）



土坑 SK01 遺物出土状況（1）（北東より）



土坑 SK01 遺物出土状況（2）（北西より）



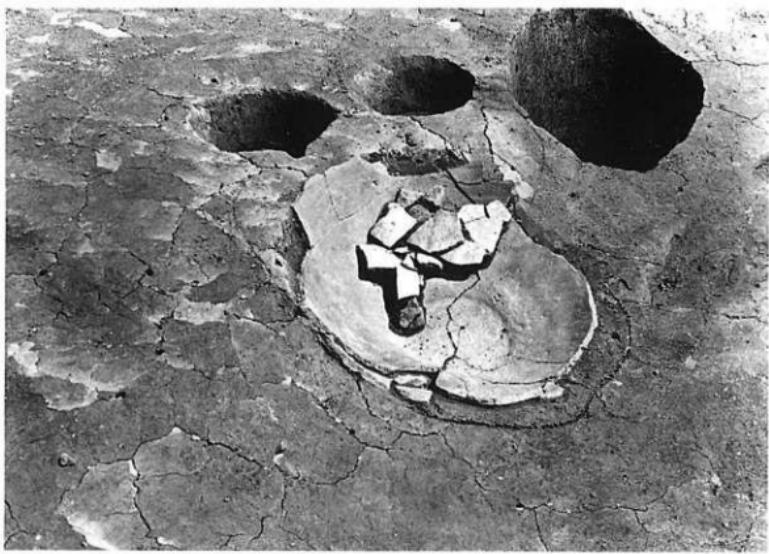
土坑 SK01・土坑 SK08 完掘状況（南東より）



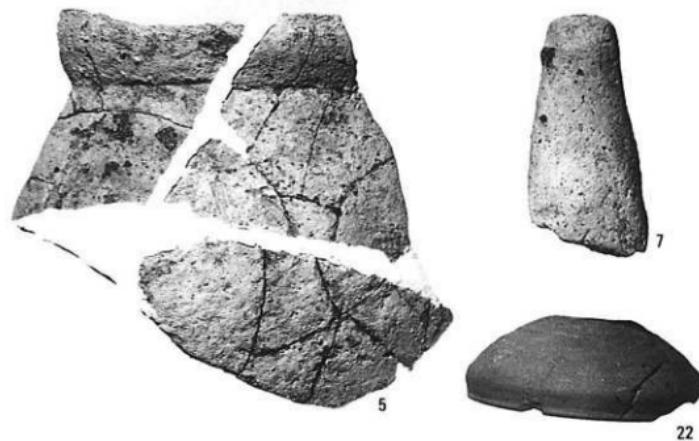
井戸 SE01 断面（北西より）



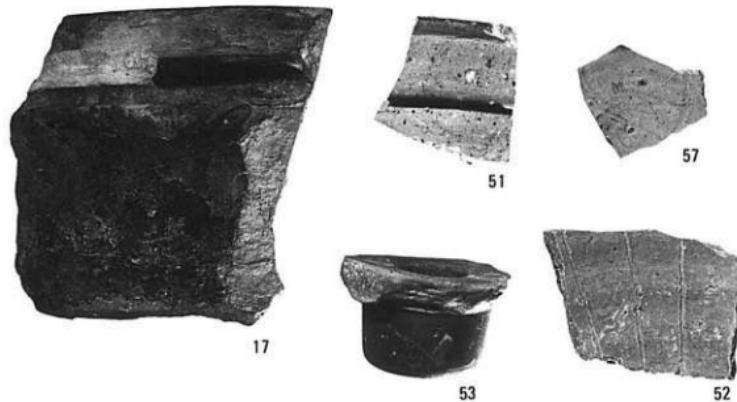
堀え付け遺構 SX01 遺物出土状況（西より）



堀え付け遺構 SX02 遺物出土状況（西より）



土坑 SK04 出土土器・須恵器



土坑 SK01 出土土器・陶磁器



46



50



47



67



66



48

出土陶器

報告書抄録

ふりがな	しがけんもりやましかつべにしうらいせきはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	滋賀県守山市勝部西浦遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	江谷 寛、桐山秀穂							
編集機関	(財)古代学協会							
所在地	〒604-8131 京都府京都市中京区三条高倉 TEL 075-252-3000							
発行年月日	平成 14年 3月 31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	35° 31'	136° 59' 8"	2001年3月26日 2001年4月11日	300	マンション建設 に伴う発掘調査
勝部西浦遺跡	守山市勝部1丁目17番23号							
所 収 遺 跡 名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
勝部西浦遺跡	集落	飛鳥時代～奈良時代 室町時代後期～江戸時代前期	溝1条	柱列・井戸・溝・土坑	須恵器・土師器 土師器瓦釜・信楽甕・信楽罐鉢・瓦質 土器鉢・白磁・青磁・磁石・鐵鍬・鐵釘		7世紀～8世紀。区画階か？	

滋賀県守山市
勝部西浦遺跡発掘調査報告書

発行日 平成14年3月31日

編集行 財團法人 古代學協会
発行

604-8131 京都市中京区三条高倉
振替 01080-4-850
Tel. 075-252-3000

印刷 中西印刷株式会社
602-8048 京都市上京区下立売通
小川東入
Tel. 075-441-3155

EXCAVATIONS AT THE KATSUBE—NISHIURA SITE
IN MORIYAMA, JAPAN

THE PALEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MMII